
機動戦士ガンダム S E E D 可能性を抱く者

傍観者

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

機動戦士ガンダムSEED 可能性を抱く者

【Nコード】

N5597Y

【作者名】

傍観者

【あらすじ】

ブームは過ぎたかもしれないけど、書いてみたくなりました。あのムウさんに、弟がいたらと言うものです。今回はハッピーエンドものにしたい。なので、いろいろツッコミどころがあるかもしれませんが、勘弁してください。

すみません。話の内容にてノワールはムウさんが扱うことになりました。

主人公のリオンにはふさわしい機体・・・今は言えませんが、話を読んでいくうちにわかると思うので、そこでお話したいと思います。

タイトルを変更いたしました。申し訳ありません。

プロローグ

お前は自慢の息子だ。

ちちうえからは、そう何度も言われた。

僕は理由を教えてほしいと何度も言ってみた。だけど、その理由は教えてくれない。ただ僕の事を自慢の息子だと・・・あの愚かな女の息子よりもとても優秀だと・・・。

兄さんにも聞いてみた。兄さんも知らないと言う。多分、本当に知らないんだろう。そんな感じがする。

僕には疑問ばかりだった。なぜ、優しくて、頼りになって、かつこいにいさんが、僕より下だって、ちちうえが決めているのか・・・ちちうえとにいさんは仲がよくない。何がどうして、こんなことになっちゃうの？

どうして、仲良くする事が出来ないの？

悲しかった。悔しかった。どうすればいいのか分からなかった。

最後に、ははうえの部屋に逃げ込んだ。もう嫌だ。家族同士が憎み合うのはもうたくさんだ！

ちちうえが僕を探しにははうえの部屋にやって来た。

ちちうえは、僕とははうえを見て呆然としていた。

「お前もその女を選ぶのか？」

「違う！ 僕はただ・・・」

「違います、ちちうえ！僕はただ、みんなが仲良しになってほしくて・・・」

「その愚かな女についていくと録なことにならんぞ！」

ちちうえは、僕を睨みつける。にいさんを見る目ともう同じだった。

「あなた！この子にそんな目を向けないで！！ムウもリオンも、あなたの息子なのよ！！！」

「お前に毒されてしまったがな。まったく貴様がいるからムウもだめになった。そして、リオンも腐らせるか！？」

僕は部屋を飛び出した。ちちうえのあの目がこわかった。

その時、僕は誰かとぶつかった。

「あ、ごめんなさい！！ 前を見てなくて・・・」

「気にすることはない。だが・・・なぜ、泣いている。」

相手は、ちちうえと同じ金髪で、にいさんよりは年上みたいでした。

「みんなが仲良くしてくれないんだ・・・なんであんなに憎み合う

のかが・・・僕にはわかんない。・・・いやだ、あんなの見たくない！！もうたくさんだ！」

僕は人目を気にせず、その人の目の前で泣きはじめた。

「リオン！ここにいたのか。」

にいさんが駆け付けてきた。

「どうやら、迎えがきたようだな。・・・私はここで失礼するよ。」

彼は、屋敷を去ろうとする。

「おい！？お前・・・どこから屋敷に入ってきたんだ？」

「それには答えられんな。・・・それに私は、危害はもう加える気はない。・・・してしまったからな。」

え？

そして、突然あらゆる方向から聞こえる爆発音。そして、沸き上がる炎。

「な、なにが・・・起こったの!？」

「貴様!？」

僕とにいさんは彼に目を向けるが、炎に気を取られていた隙に姿を消していた。

「リオン！！外に出るぞ！！」

「う、うん！！」

にいさんに言われるがままにただ走る。

屋敷は至るところで爆発と炎であふれていた。

「……………リオン、お前は先に出る。」

「にいさんはどうするの！？」

「母さんを助けに行く。俺もすぐ行くから待ってる！」

ははづえがまだ……………！！

でも、

「はやくしろ！！」

「う、うん！！」

僕には、どうしようもない。

足手まといでしかない。

僕は、家に伝わる特殊な力……直感的に未来を予知する能力をフルに使い、屋敷から抜け出した。

僕が出る頃には、屋敷は、炎に包まれていた。

だけど、にいさんは生きる。それだけは確信が持てた。

あれ？

ちちうえとははうえは・・・

彼等は助からない。

そんな事はない！！

にいさんは助かるのに・・・

なんで二人は助からないって、言っているんだ？

「みんな・・・」

すべてが焼け落ちていく。

「うそだ・・・」

認めない。そんなこと・・・

予知なんて、ただのまやかしだ・・・

当たるな、当たらないでくれ！！

にいさんのが奥の方から見えた。人影は一人・・・にいさんしかない。

なんで、分かってしまつんだろつ。

未来は決められているのか？

僕はただ、知るしかできないのか？

違つ!!!

「にいさん……」

「悪い……助けられなかつた。」

にいさんは悲しい顔をしている。

もう二人はいない。

いないんだな……

「リオン……俺がお前を守るからな。」

にいさんは僕を抱きしめながら誓つ。

「だったら……僕だつてにいさんの力になる……」

にいさんにだけ、背負わせない。にいさんだつて悲しいはずだ。

「リオン……なら、大きくなつたら、期待しようかな。だけど、今は甘えてていいんだぞ。」

その言葉で僕は耐え切れず、また泣いてしまう。

にいさんは変わらず僕を抱きしめている。

でもね、にいさん。

僕だっていつまでも甘えたりしない。いつか、にいさんに恩返しするよ。必ず……

そして、時が流れた。

兄はその後、遺産相続についての問題にかたをつけ、程なく地球連合軍に入隊した。

このころはザフトと連合の戦い……ナチュラルとコーディネーターの戦いと言ってもいい。そんな悲しい戦争が起こっていた。

兄はザフトのMSを次々に倒していった。軍はいつしか、兄さんを『エンデュミオンの鷹』と呼ぶようになり、英雄扱いした。

俺は兄さんの勧めで、オーブに住むことになった。将来大学は工学系……技術全般かな、その道に進むことにした。機械を見るのが好きだったし、実際知れば知るほど興味が湧いて来るからね。それに、戦争はいずれ絶対に終わる。その時に俺は、宇宙にコロニーをいくつも作る。まあ、一人じゃ無理だけど、いつかやってみたいな。

先のことは分からないけど、俺は確実に前に進んでいると思う。

だから、きつとこの夢も叶うよね。

そう俺は願いたい。

設定（前書き）

主人公設定です。

複数つけてきついな。

設定

主人公設定

名前 リオン・R・フラガ

年齢 16歳

髪はムウと同じ色で髪型は、ガンダム00のグラハムさんに近い。

目の色は青。

身長 173cm

好きなこと

機械いじり、友達

嫌いなこと

理不尽なこと

ムウ・ラ・フラガの弟。小さい頃から直感がよくあたることを嫌っている。性格は頑張り屋で真面目。やるからには手は抜きたくない。でも戦争は嫌いで、できることなら戦いたくないと考えている。人種の違いについての意識が低く、ヘリオポリスで出会ったキラとは仲が良い。(アスランに次ぐ親密さ。)

ザフトによるガンダム奪取作戦に巻き込まれ、戦闘に参加すること
に・・・

ストライクF

Strike Phantom

型式番号 GAT-X105F

全高 17.72m

重量 64.8t

装甲材質フェイズシフト装甲

武装 M2M5 トーデスシュレッケン12.5mm自動近接防衛
火器×2
各種ストライカーパック武装

M8F-SB1 ビームライフルシューター×2 or ビームサー
ベル×2 腰に装備

57mm高エネルギービームライフル

175mmグレネードランチャー

25mmビームガトリング

いずれか一つまで選択可。

GATシリーズのストライクの強化された機体。

本来ストライクも改修される予定ではあったが、戦局の打開が急務な為、一機のみとなった。

ストライクの武装強化と運動性能の引き上げに成功し、機動性と汎用性は、他の追隨を許さない。

設定（後書き）

気ままにやっていきたいけど、はやく進みたい。

がんばっていきます!!

ヘリオポリス（前書き）

前置きが長いけど、勘弁してください。第一話始まります！

ヘリオポリス

コズミック・イラ（C・E）15年、万能の天才として世界中から注目されたジョージ・グレンが自分が遺伝子操作された人間であることを告白。同時に製造方法を公開したことで、世界中で遺伝子操作された新人類「コーディネイター」が誕生した。

各国で遺伝子操作は法律上禁止されたが、子に優れた能力を与えようとすると親は減ることはなく、彼らは徐々に増えていった。しかし、遺伝子操作されていない通常の人類「ナチュラル」は彼らの優れた能力に対し嫉妬・恐怖を抱き始めた。迫害を恐れたコーディネイター達は、スペースコロニーで政府「プラント」、軍隊「ザフト」（Z・A・F・T・C）を組織した。

C・E・70、プラントと地球側との交渉の席で起こった爆破テロを切っ掛けに、「地球連合」はプラントに宣戦布告。農業用コロニー・ユニウスセブンに核が撃ち込まれ、24万名以上にも及ぶ死者が出た。プラントは核攻撃を封じるため、核分裂を抑制するニュー・トロンジャマーを地球上に散布。結果、核だけでなく、原子力発電も行えなくなったことによって地球上は深刻なエネルギー不足に陥り、飢餓や災害によって数億人の死者が出た。これにより双方の反感情はピークに達し、戦争は激化した。

NJの影響で通信やレーダーが使用不可能になったことで、既存の兵器は弱体化。物量で勝る連合の勝利で終わると予想されていた戦争は、プラントが開発した人型機動兵器モビルスーツ（MS）の登場によって拮抗し、11ヶ月が経過した。

資源衛星コロニーヘリオポリス

外は戦争中なのだが、中立と言うこともあつて内部の住民は平和に浸っていた。様々な建築物が立ち並び、人が行き交う大通りの喧騒は止まることは無い。

そう、中立国なのだ。このヘリオポリスは現オーブ首長国連邦国家元首である、ウズミ・ナラ・アスハの中立宣言以降、オーブは「他国を侵略せず、他国の侵略を許さず、他国の争いに介入しない」の武装中立政策を取っているため、ザフト、連合の干渉が基本的に存在しない。

さらにオーブは、コーディネーターへの差別感情が他の連邦国家に比べそれほど強烈ではない。

コーディネーターとナチュラルが仮初だとしても共に手を取り合い平和に暮らしていた。戦争など起こってないかのように……

だが、戦火はこの地をも飲み込もうとしていた。

あの火災から数年後、リオン・R・フラガはヘリオポリスに渡り、工学系と生命科学系の科目を選択し、勉強にいそしんでいた。彼はクラスの中でも抜きん出た才覚を発揮し、成績は常にトップ、そして誰よりも知識に貪欲な彼は努力を惜しまず、先生方の評価も上々、まさに模範的な優等生である。しかし、彼はその気さくな性格からクラスメートからの人望も厚く、彼らもまた彼によって成績が引上げられていった。そんな順風満々な学生生活を送っていた。

そんなある日

「……であるからにしてC・E・70年4月17日、地球連合軍第5、第6艦隊はプラント本国を目指し、月面プロレマイオス基地より侵攻した。これに対し、プラント管理下の資源衛星ヤキン・ドゥーエ付近にて、迎え撃つザフト軍と地球連合軍は交戦を行った。……ここまでで質問はないか？」

side リオン

世界史といっても、もはや戦争のことしか語ってないな……近年は戦争しかやってないけど……

まったく、人種の問題はよくわからないな……同じ人間なはずなのになあ……

「……質問がないならば、今日の授業はここまでだ。来週の授業までに第一次ヤキン・ドゥーエでの時代背景を客観的な立場から推察し、レポートをまとめとくように。以上だ。」

本日最後の授業が終わり、学生たちはそれぞれ荷物をまとめ、退室してゆく。

「……まったく、いやなレポートだよな、戦争なんて……お前もそう思うよなリオン？」

俺の隣にいるのは、友人の一人、トール・ケーニヒである。彼もコ―ディネーターとかナチュラルとか関係ないと考えている奴だから話しててあまり気分は悪くならない。たまに恋人？であるミリアリア・ハウとの惚気話を聞かされること以外は好感が持てる。

「そうだな。本当になんてくだらない理由で戦争してるんだか・・・お前みたいな奴がいるというのにな・・・」

思わずため息が出てしまう。

「・・・とりあえず、みんな。今日は早い時間帯で授業終わったし、久しぶりにみんなとどっか食べに行こうぜ。」

サイ・アーガイルが若干暗いムードになってしまったみんなを気にかけるように言う。

「そうね。日頃勉強三昧の日々だから、たまには息抜きも必要ね。行きましょー!」

彼の婚約者であるフレイ・アルスターがハスキーな声を出しながら続いてくる。彼女はアルスター家のお嬢様で、典型的なお嬢様タイプというなんというか絵に描いたような人だ。ちよつとコーディネーターに対し、偏見は持つてるがキラに対しても友好的だ。

キラはなんか動揺してるし、トールも「君はどうする?」とミリリアに声をかけ、「私も行くわ」「サイ! 俺達もいいか?」こんな感じで食事メンバーは二名増えた。現在4名。

「そりゃ人数多いほうがいいだろ? キラとカズイ、リオンはどうするんだ?」

「じゃ、じゃあ僕も行くよ!」
あわててイエスと発言するカズイ・・・そんなに早く即答していいのだろうか?

「じゃあ僕も参加するよ。ほかのレポートはやり終えたし、今日のレポートも期限まで日があるしね」

さらに二名追加。現在6名。どんどん増えてるな、おい・・・まあいいことだけどね。

「よし、じゃあ俺も参加するよ。ほんと久しぶりだよなあ、こういうの・・・」

当然俺も参加だ。ここで「俺、パスするわ」とかいえねえ・・・だってさ、6人OKで俺だけNOはまずいだろ？ それにこいつらといると退屈なことにはならないしな。

「じゃあ行くか」

サイの言葉で、俺たちはとある某有名なイタリア料理店に向かう。

「じゃあ、みんなで割り勘にしようぜ。」

俺の提案にフレイが異を唱えた。

「いいわよ。私が持つから。そこは気にしないでいいわよ」

なんとというブルジョワ発言・・・まああちらの厚意を無碍にはできないし、いいか。

「じゃあ、フレイのおごりなんだね。・・・ゴチになるよ」

「フレイがそういうなら・・・じゃあゴチになります。」

「右に同じく」

「僕もね。・・・」

「私も」

カズイの目がもろろとうとしている。おそらくこれから食べるものを考えて、うつとりしているようだ。

「おい、戻ってこい〜カズイ。うれしいのはわかるが危ない目になっていたぞ。」

「え・・・ええ！？ い、いや違うよ！！ 僕はただ食べ物のことを考えていたわけじゃなくて・・・」

・・・バレバレだけど、まあ深くコメントするのはよそうか・・・

そんな感じで、サイと愉快的仲間たちは店へと向かう。

side out

「そう難しい顔をするな、アデス」

傍らの男に苦笑されて、アデスは更に眉間の皺を深めた。

「は・・・しかし」

ここは『ヘリオポリス』から程近い宙域である。

小惑星の影に、2隻の戦艦が待機していた。

ザフトのナスカ級『ヴェサリウス』と、ローラシア級『ガモフ』だ。

アデスは『ヴェサリウス』をまかされる艦長だった。

がっしりした体型で、四角くく厳つい顔立ちの彼は、自分の懸念を口にした。

「評議会からの返答を待つてからでも、遅くはなかったのでは・・・

」
「遅いな」

傍らの男、ラウル・クルーゼは即答した。

この男は風変わりな銀色のマスクで顔の上半分を覆っていた。

波打つ金髪、すらりと引き締まった顔つき、マスクで隠れていない顔の部分は整い、

かなりの美丈夫ではと思わせる。

敵にも味方にも、有能さと容赦ない戦いぶり知られる、この部隊の長である。

「私の勤がそう告げている」

ラウは手にしていた写真を、ピンと指先ではじいてよこした。

不鮮明な画像だが、そこには巨大な人型にも見える装甲の一部が写っていた。

「地球軍の新型機動兵器、ここで見過ごさば、その代価、いずれ我らの命で支払わね

ばならなくなるぞあそこから運び出される前に、奪取する」

その頃、ヘリオポリスの管制塔にはリオンの兄であるムウ・ラ・フラガが待機していた。

「接近中のザフト艦に通告する！貴艦の行動はわが国との条約に大きく違反するものである！ただちに停船されたし！」

ヘリオポリス管制塔にアラームが鳴り響いた。

だが”ヴェサリウス”、ガモフは停船勧告に応える様子はなかった。そして・・・

「強力な電波干渉！ザフト艦から発信されています！」
とたん、管制塔に冷たい空気が流れる。
その意味するところは一つだった。

「これは、明らかに戦闘行為です！」
「敵は？」

ムウは黒と紫のパイロットスーツに身を包んでいた。

『エンデュミオンの鷹』との異名を取る、地球連合軍のエースパイロット。

彼の任務は、数人のパイロット候補生をこのコロニーに送り届けることだった。

「2隻だ。ナスカ及びローラシア級。電波妨害直前に、モビルスーツの発進を確認した」

「チツ・・・ルークとゲイルはメビウスにて待機。まだ出すなよ」
そして、格納庫へと走った。

side out

ピーキン！！

え、この感じはなんだ？ 何か・・・何かが来るのか？

「どうかしたの？ リオン？」

キラが怪訝そうに尋ねてきた。

「いや・・・なんでもない」

そんな馬鹿な・・・攻めてくる敵なんて今はいないはずだ。しかし、その考えはそのあと覆されることになる。

アークエンジェル艦内

「艦長」

『アークエンジェル』司令ブースの中。

「慌てるな、迂闊に騒げば向こうの思うツボだ。対応はヘリオポリスに任せる！！」

通信に対応する艦長。

「・・・分かっている、いざとなれば艦は発進させる」
荒々しく切ると振り向き、ナタルとノイマンに

「ラミアス大尉を呼び寄せ、『G』の搬送を開始させい！！」
と命じた。

「は！」

工場区のうちここで爆発が起こり、轟音と凄まじい揺れが『ヘリオポリス』を襲った。

爆風に飛ばされる人々、誘爆を引き起こし、炎上する施設、鉱山内部の岩盤が崩れ、瓦礫が降り注ぐ。

コロニー全域に衝撃が走った。

「きゃあ！？」

「隕石か？」

「な、何！？」

「いったい何が・・・」

そんな・・・こんな時にあたってほしくなかった・・・いったいどこが攻めてきたんだ？

轟音と凄まじい揺れを感じ、その間にも足をすくうような振動が襲ってくる。

逃げ惑う人々。呆然と立ち尽くしている俺たちに誰かが駆け寄ってくる。

「逃げるんだ、ザフトに攻撃されている！コロニーにモビルスーツが入ってきてるんだ」

よ！ 君達も早く！！」

ヘリオポリス市民が避難を促す。

皆、一瞬立ちすくんだが、事態がよくつかめないまま、彼らはあとに続いた。

そのとき、金髪 of 髪に帽子をかぶった少年が反対方向に駆け出して行った。

何だあいつ！？ 正気か！？

「きみ！」

逆方向へ駆けていく彼のあとを、キラは思わず追いかけた。

「おい、待てよキラ！・・・まずいな！サイ！みんなで先に行つてくれ！」

そう言つてリオンも追いかける。

「わかった！気をつけるよ。 行こうみんな！」

「う、うん」

「気を付けてね、リオン・・・」

「待ってるからな」

「ちよつと・・・」

フレイが呼び止めるが、今は無視だ。・・・なんて馬鹿なことするんだあいつ・・・。とりあえず、会ったらげんこつだな・・・。

ザフト艦から発進した3機のジンはヘリオポリスの自衛MAミストラルを蹴散らし、ヘリオポリスに向かっていた。

MA『メビウス・ゼロ』に搭乗したムウはザフトのMS『ジーン』の突入を認め、

艦長に通信した。

「船を出して下さい。港が制圧される。こちらも出る！」

「あれだ・・・クルーゼ隊長の言ったとおりだ」

冷静な口調で言ったのはイザーク・ジュールだった。

バイザー越しにも分かる、冷たく整った顔立ち、まっすぐに切りそろえられたプラチ

ナブロンドがさらにその印象を強めるが、今はヘルメットに隠されている。

「つつけば慌てて巣穴から出てくる・・・って？」

ディアツカ・エルスマンがクスクス笑った。

金髪に浅黒い肌、陽気そうな外見だ。

ヘリオポリス内部に侵入していたザフト軍はいずれもエリートパイロットであること

を示す赤いパイロットスーツを着用していた。

にわかには慌しくなった。『モルゲンレーテ』工場付近の様子を、スコープで見つめていた。

作業服を身に着けた栗色の髪の女性が、視界に入る。彼女が中心となって指示を出しているようだった。

背後の開かれたシャッターから、巨大なコンテナを積載したトレーラーが出てくる。

「やっぱり間抜けなモンだな、ナチュラルなんて」

イザークが冷たく言い放つと、発信機のボタンを押した。

「落ち着けニコル」

他に聞こえないようアスランは肩膝をついて硬くなっているニコルに他には聞こえないように小さく囁く。

ニコルはぎこちないながらも笑みを返す。

「行くぞ」

アスランを筆頭に移動を開始する。

イザーク、ディアッカ、ラスティ、ニコルもそれに続いた。

「ラミアス大尉。艦との通信途絶。状況不明」

部下より連絡を受けた直後、ザフトの砲撃を受けた。

「ザフトの……！！ X105とX105F、303を起動させて！！」

受身を取ったあと走り出した。

「とにかく工場区から出すわ！！」

「分かりました！」

部下があとを追いかけた。

工場区の外では、激しい戦闘が繰り広げられていた。

地球連合君は地对空ミサイルで応戦しようとするが、ミサイルを積んだ装甲車は片端

からザフトのMSジンに潰されていく。

ザフトの潜入部隊はその間隙をぬって、搬出口へ接近しつつあった。無駄のない動きでトレーラーに取りつきながら、イザークが指示する。

「運べない部品と工場施設は全て破壊だ。報告では6機ある筈だが、
・ ・ ・あとの3機

はまだ中か？」

工場から出たところで、3台のトレーラーが身動きならなくなっていた。

その荷台にはそれぞれ一体ずつ、明らかにモビルスーツと判る機体が積まれている。

潜入部隊の目的はそれだった。

「オレとラスティの班で行く。イザーク達はそっちの3機を」

アーサーが叫び、アスラン達に合図する。

「OK、任せよう。 ・ ・ ・各自搭乗したら、すぐに自爆装置を解除」
そして、アスランは工場の搬出口を目指した。

side キラ

キラが追い着いてその腕を捕らえた。

その時、背後のどこかで爆発が起こり、爆風が帽子を吹き飛ばした。

「お ・ ・ ・おんな ・ ・ ・の子？」

キラがぼかんと呟くと、相手は鋭い目でキラを睨んだ。

「 ・ ・ ・なんだと思ってたんだ、今まで」

「いや ・ ・ ・だって ・ ・ ・」

一瞬気まずい雰囲気があったが、続けざまに起こった爆発と呼び声がそれを吹き飛ばす。

「何してるんだよ、そっち行ったって・・・」

はやく避難しないと・・・!!」

「何でついてくる。そっちこそ早く逃げろ!」

「キラ!!」

向こうからリオンが叫びながら走ってくる。

「リオン!?!?・・・なんで?」

「迎えに来たぞ、馬鹿野郎!! まったくなんて無茶するんだよ・・・」

少女はキラの手を振りほどいた。

「いいから行け! 私には確かめねばならぬことがある!」

「行けったってどこへ? もう戻れないよ!」

さっきの爆発で、来た道は無残にも崩れ落ちている。

キラはしばし考え、いきなり少女の手を取って走り出した。

「ええっと、・・・ほら、こっち!」

リオンもそれを追っ

少女の目につっすらと涙がにじんでいた。

「こんなことになってはと・・・私は」

「とにかく避難が先だよ！ 工場区に行けば、まだ避難シエルターが」

キラと少女は通路をたどって走り、やがてひらけた場所へ出た。格納庫のようながらんとした空間に突き出て、キャットウォークの上だった。

階下では銃撃戦の真最中だ。外からは何かが爆発する音も聞こえる。だが、目に入ったものに、キラ達は思わず足を止めてしまった。

「これって・・・」

金属独特の冷たい輝きを放つ、人型の兵器・・・まさかこれは・・・少女は、よろよると手すりに寄った。

「やっぱり・・・」

キラの隣で少女が、がくりと膝をついた。

キャットウォークの手すりを両手でかたく握りしめ、うめくように叫ぶ。

「地球軍の新型機動兵器・・・お父様の裏切り者！」

side out

ポカーン????????

こいつは今、なんと言った?? なぜにMSモビルスーツを見て叫んだかはわからない。直感で感じた。こいつは・・・単純な奴だと、騒がしい奴だと。今も騒がしいが・・・

彼女の声は高い天井にはね返り、大きく響いた。

キラは少女を手すりから引き離し、後ろへ飛びのいた。

銃声が響き間一髪のところ、銃弾が手すりを掠めて飛ぶ。

「冗談じゃない！」

キラは少女の手を取って走る。

「泣いてちゃダメだよ！ ほら、走って！！」
「子供！？・・・どうしてこんな所に・・・」
その時、三人を撃ったマリューは心の中で懺悔をしていた。

side out

「ほう、すごいモンじゃないか・・・どうだ、ディアッカ？」
「OK。アップデータ起動、ナープリング再構築、キャリアブレード完了・・・動ける」

イザークの乗った『X102デュエル』とディアッカの乗った『X103バスター』がトレーラーから立ち上がる。

「ニコル！」
イザークが呼びかける。

「待ってください、もう少し」

ニコル・アマルフィーはキーボードを叩いている。

淡い色の巻き毛と大きな目をし、色白で少女めいた顔立ちの彼は15歳。

そしてニコルの乗った『X207ブリッツ』も立ち上がった。

「アスランとラスティは？・・・遅いな」

「ふっ、奴らなら大丈夫さ。ともかくこの3機、先に持ち帰る。クルーゼ隊長にお渡しするまで壊すなよ」

ディアッカの言葉を制し、3機は宇宙へと舞い上がった。

side リオン

「ほら、ここに避難している人がいる」

退避シエルターの入り口へたどりついたキラ達は、インターフォン

を押した。

<まだ誰かいるのか？>

スピーカーから応答の声がした。

「はい！僕と友達もお願ひします。開けて下さい」

<2人か！？>

「いえ3人です。」

スピーカーからの応答に、一瞬間があいた。

<・・・もうここは一杯なんだ。左ブロックに37シエルターがあるが、そこまでは

行けんか？>

キラは左側を見たが、廃墟と化していた。

「なら、1人だけでも！ お願いします。女の子なんです！」

まあ順当だろうな・・・

『・・・すまん！わかった！』

ロックを示すランプが赤から青へ変わり、扉が開いた。

「入って」

虚脱したように黙り込んでいた彼女を強引にシューターに押し込んだ。

「えっ、・・・私は！」

「いいから入って！ 僕達は向こうに行くから、大丈夫だから早く！」

ガラスを通して少女の口が「待て！ お前・・・」と動くのが見えたが、すぐ下層のシエルターへと運び去られた。

なんというか・・・無鉄砲な奴だったな・・・真っ先に戦場で死ぬタイプかな？

ランプが元通り赤になるのを確認して、キラ達は走り出した。

「ごめんね・・・」

「気にするな。俺は気にしない」

side キラ

またもや格納庫のキャットウォークに戻ると、階下では依然戦闘が続いていた。

「ハマナ、ブライアン、早く！ X105、X105F、303を起動させて！」

女の声が格納庫内に響いた。

キラの頭に何か稲妻の様な物が走った。直後、例のモビルスーツの影に身を隠しながらライフルを撃つ、作業服姿の女性に気付く。

キラははっとした。

一人のザフト兵が、軍人らしいさっきの女性を背後から狙っている。

「危ない、後ろ！」

思わずキラは叫んでいた。

彼女は声に反応して振り返り、敵兵を撃ち殺した。

奥にあったもう一体のモビルスーツの方から、銃撃の音に混じって怒号と悲鳴が上

がった。

「来い！」

女性はキラ達に向かって怒鳴った。

「左ブロックのシエルターに行きます！ おかまいなく！」

キラが大声で言うと、彼女はライフルを撃ちながら叫び返した。

「あそこはもう、ドアしかない！」

その言葉にキラ達は足を止めた。

瞬間、後ろで爆発が起こった。

彼らの決断は早かった。

ためらいもなくキヤットウオークから身を躍らせた彼の姿に、女性兵士は目を疑った。

落差5、6メートルはあるだろう。物柔らかな外見にそぐわぬ敏捷さで、キラ達は猫の

ようにMSの上に着地した。

驚きに一瞬動きを止めた女性の背後で、モビルスーツを守って戦っていた男が、1人のザフト兵を打ち倒した。

「ラストイ！・・・くそおっ！」

赤いパイロットスーツのザフト兵が叫び、仲間の命を奪った男に銃を向ける。

放たれた銃弾が命中したのか、崩れるように男が倒れた。

「ハマナ！」

女性兵士がその名を呼んだ瞬間、ザフト兵は振り向きざまに彼女を撃った。

「あうっ！」

銃弾が彼女の肩に命中し、血が飛び散る。

キラは思わず駆け寄った。

ザフト兵は弾詰まりでも起こしたのか、手にしていた銃を捨て、ナイフを抜き放って彼女に迫る。

side リオン

まずい！！

女性兵士の近くにはキラが・・・

「はなれるおおおお！！！！」

コンバットナイフを持って突撃するザフト兵を蹴り飛ばす。

「ぐあっ！！」

しかし、奴も反撃し、崩された体制からナイフを突き出す。

「うおっ！！！！」

あわてて避けるけど肉弾戦はこちらに不利かも・・・

「邪魔だ！！！！」

ナイフを使い、なおも攻撃してくるザフト兵。・・・その後ろからもう一人だと！？

「そこだあ！！！！」

「やばっ！！！！」

チャンスとばかりに隙を突くザフト兵。

かろうじて躲せたがバランスを崩し、落下するリオンとザフト兵。

「やばっ！！！！」

「しねえ！！！！」

てか落下するときまで攻撃してくるのかよ!？ 受け身取れないぞ？

「ぐわっ!!!??」

案の定、頭から落ちたザフト兵……一応訓練したんだよな……
・?

まあ不可抗力だ、悪く思うな。

とりあえず……どうしよう? 残ってるMSあるかな?

side キラ

「……アスラン?」

そんな……どうして彼がザフトに?

「……キラ?」

声を返したのは誰であろう、ナイフを構えたザフト兵だった。
意思の強そうな緑の瞳が、キラの姿を映して見開かれていた。

思っても見なかった形での再会に、2人は言葉もなく立ちつくす。

その隙をついて、女性兵士が負傷した肩をかばいつつ、銃を構えた。
間一髪のところ、それに気付いたアスランは飛びのく。

銃声が響き、さっきまで彼のいた空間を弾が雑いだ。

そしてキラは女に体当たりされ、彼女もろともモビルスーツのコックピットへ転がり

込んだ。

赤いパイロットスーツとクリスが、他のモビルスーツへ向かうのが
見えた。

「シートの後ろに！」

女は指示し、モビルスーツの立ち上げにかかった。

「この機体だけでも……。私にだって、動かすくらい……」

……アスラン……？

計器類に光が入り、ブウン…という駆動音が徐々に高まる。

モニターが明るくなり、浮かび上がった文字列がキラの目に飛び込んできくる。

・・・Generals

Unilateral

Nero-Link

Dispersive

Autonomic

Maneuver・・・

命を吹き込まれたかのように、モビルスーツの両目に光が灯り、ぴくりとその指が動

く。咄嗟にキラの目は、赤く輝く頭文字を拾い上げていた。

「ガ……ン・ダム……？」

エンジンが低い唸りを上げ、巨大な四肢がゆっくりと動き始めた。

メンテナンスベッドに機体を固定具がバシバシと音を立てて弾け飛んでいく。

どこかぎこちない動作で、それでもモビルスーツは爆炎の中、立ち上がる。

炎が鋼色の装甲に照り映え、聳え立つその威容を紅く照らし出した。

side リオン

まだ、残っていたか！！

俺の視線の先には、まだ空きのMSが存在していた。ザフト兵もない。俺は急いで俺はその機体に乗り込む。

俺は、MSのパワーをオンにし、システムが立ち上がってゆく。計器類に光が入り、駆動音が徐々に高まる。

モニターも次第に明るくなり、浮かび上がった文字列がリオンの目に飛び込んでくる。

・・・Generals
Unilateral
Nero-Link
Dispersive
Autonomic
Maneuver・・・

そして、機体名称も表示された。

「GAT-X105F・・・ストライクフアントム・・・」

運命は、動き出した。

ヘリオポリス（後書き）

ムウさんは感じたようですね。

NTのパクリかもしれないけど、この力が重要になっていきます。
リオンの能力はNT超えてるかもしれない・・・

ガンダム(前書き)

ミゲルさんには、生き残ってもらおうとおもいます。

幸があまりになかったので・・・

ガンダム

side out

「よくやった、アスラン」

ジンに乗っている金髪のパイロット、ミゲル・アイマンがアスランに言う。

来ているパイロットスーツは緑を基調としていて、一般兵だと伺うことが出来た。

<ラステイとアルマは失敗だ・・・向こうのMSには地球軍の士官と民間人らしい少年が乗っている・・・>

その言葉を聞いて、ミゲルが目にしたのは、まだたどたどしい動きで着地するもう二機の地球軍の新型MS。それと同時にミゲルは表情に憤りを浮かべた。失敗は、死でもある。

「なら、あの機体は俺が捕獲する、お前達はそいつを持って先に離脱しろ」

side キラ

着地したとたん、機体が大きく傾き、キラは倒れないようにシートの背にしがみついた。この人はけがをしているのに、懸命にあちこちのレバーやスロットルを調整している。モニターには外部カメラを通した映像が刻々と映し出されている。キラはそれを見て啞然とした。通いなれた道筋、日常の風景が、見るも無残に破壊されていた。街路には瓦礫が散らばり、あちこちから黒煙が上がっている。

画面の隅に動く人影を見て、キラは驚愕し、あわてて身を乗り出した。

「サイ!? トール! ミリアリア! カズイ!」

瓦礫の間を縫うように走っていた。

その時、ジンがマガジンを発砲した。

「くっ!」

あわてて彼女はストライクをジンのほうを向き直らせ、フェイズシフト装甲を発動させた。そして弾丸はすべて跳ね返り、ストライクは無傷だった。

そして、ジンはそのまま剣を抜き、ストライクに切りかかる。

ストライクは両腕をクロスさせ、剣を両腕で防ぐ。そこから凄まじい火花が飛び散った。

それはストライクの装甲がジンの剣を削っている証拠だった。

このようなストライクの装甲はフェイズシフトと呼称され、実体弾が全く効かないようになっている。

地球軍のMS、Xナンバーには標準装備されている代物だ。

流星にそれに驚いたのか、ミゲルの顔も驚愕の色を隠せない。

「何い!?!」

それにミゲルが驚く。

腕と剣の鏝迫り合いは、ミゲルが一旦剣を引き、後に跳躍したことで終わりを告げた。ストライクを正面に捉えたジンのモノアイが光

り、剣を構えなおす。

「こいつうー！どうなっている、こいつ装甲は!?!」

予想外の出来事に、ミゲルがアスランに怒鳴りつける。しかし、静かにOSを解析していたアスランは淡々と語り始めた。

「そいつ等は、フェイズシフトの装甲を持つんだ、展開されたらジンのサーベルなど通用しない」

そう言つてフェイズシフトを展開するアスランのイーゼス。神の盾の名を冠するその機体はセンサーが強化されており、一目でXナンバーの指揮官的位置づけだと窺える。

その色は赤紫色に統一されていて、周囲から浮き立った存在を見せ付けていた。悔しそうに表情を歪ませるミゲルを尻目に見ながら、アスランのイーゼスは発射された有線ミサイルや、それを運用する車両を頭部のバルカンで撃ち落した。それらは全て、紙屑の様に飛散した。

爆炎が起きる中、ミゲルはアスランに言った。

「お前達は早く離脱しろ、いつまでもうろつろするな!」

「.....」

アスランはストライクに昔の親友の面影を重ねた。

プラント、地球の緊張状態が続いたとき、月の幼年学校に通っていた二人。

しかし、地球の息がかかった月から避難をするという父親の意思に

当たり、アスランはプラントへと旅立つこととなった。自分の作った小型の機械のペットを手渡して。

「・・・・・・・・キラ・・・・」

別れの日に見た幼馴染の今にも泣き出しそうな顔が、アスランの脳裏をよぎる。それを振り切るように、アスランは空高く舞い上がり、戦線を離脱した。

飛び立つ機体を目で追っていたマリューは前方にいる敵に注意を怠っていた。先程から鳴り響いているアラートも、耳慣れてしまったためか、本来の役割を忘れてしまっている。だが、キラは依然として前を見ていた。そして、眼前のジンが剣を振り上げて迫って来た。

「前！」

キラの声ではっとし前を見るマリュー、モニターいっぱいを覆い尽くすジンの巨体。不安と焦りが入り混じる中、マリューは唯一の飛び道具であるバルカンのトリガーを汗ばんだ手で引絞った。

搭載されている砲塔システム。

だが、「イーゲルシュテルン」は自動照準をしていないため弾は当たらなかった。

その余裕のない動作に一つの確証を得るミゲル。小さい嘲笑を上げ、トリガーを握る手に力を込めた。

「ふっ！いくら装甲が良かろうが！！！」

ジンの剣が空を裂いた。しかし、体を横に逸らし、間一髪で避けるストライク。そして、ジンは飛んだ反動でもう一度スラスタをふかし、剣を振り下ろした。

ガガアアアアン！

耳を劈く金属音が振動となって襲い来る。装甲にダメージは無いと言っても中に入っている人間は別だ。

激しい振動に体を揺さぶられ、声にならない悲鳴を上げる二人。ミゲルはもう一度破壊を試みたのだろう。

「そんな動きで！！！！」

今一度跳躍し両手で構えた剣を勢い良く振り下ろした。それはストライクの右肩に当たり、後に飛ばされた。そして、ストライクは建築物に突っ込んだ。避難勧告が出されていたため死人が出なかったのが幸いだろう。

「きゃあああ！」

マリユーが腕のいたみを堪えきれず、悲鳴を上げた。額を伝う汗は脂汗となり、息は荒くなる。

ルージユを引いた唇も、今では苦痛に歪んでいた。

そんな中、視線追従式のモニター横を見ていたキラは、必死で逃げ延びようとする人々を映すモニターの中に、先程まで一緒にいたサイ達を見つけた。肩で息をしながら、必死に逃げ延びようとするサイ、トール、ミリアリア、カズイ。

「生意気なんだよ！ナチュラルがMSなど！！」

ミゲルは止めを刺すため後ずさりするストライクを追い詰め、コックピットを突き刺すため剣を引いた。

幾ら対物理衝撃性能のよい装甲でも、中の人間を殺してしまえばただの鉄の塊である。

それはコックピットの人間を殺すために、衝撃を与えることでもあった。

side リオン

なんてめちゃくちななOSなんだ・・・一から書き換えないと・・・

・
キーボードを打ちながら、俺は思った。これ・・・不良品だろ・・・正気じゃないOS積み込んでるし、使い物にならないだろ・・・

OSの書き換えが終わり、ゆっくりとストライクファントム（以下ファントム）で立ち上がる。

ん？ あれは確かキラたちが乗ってた機体だ！ それにあれはジンか！？

side キラ

「いい加減にしろー！！」

ズガアアアア！！！！

いったい何が・・・

突如、側面からの衝撃にジンが倒れこむ。

「ぐおおお?!?!」

突然の衝撃にミゲルは驚きシートから引つ張られるような錯覚に叫び声を上げていた。予想だにしていな反撃をくらい、ジンは横に吹っ飛ばされる。そして、ジンは宙を舞い、地に滑り落ちた所には轟音、振動と共に粉塵が舞いあがった。

マリユールとキラがそれを観てみるとそこにはPS装甲を起動させ、胴体部は今まで薄い灰色だった所がストライクと同じ、否、少し暗いカラーリングとなった『X-105F、ストライクファントム』が立っていた。

「はあ、はあ、．．．ここにはまだ人が居るんですよ!?!?こんなものを組み立てて乗っているなら、何とかしてくださいよ!?!」
僕がやるしかない!!

「．．．どいて下さい!」

キラはこの隙にマリユールを押しつけ、シートの横からプログラム入力用のキーボードを引き出すとOS等の調整を始めた。

「くっ．．．! キャリブレーション取りつつ、ゼロ・モーメント・ポイント及びCP

Gを 再設定．．．チツ! なら擬似皮質の分子イオンポンプに制御モジュール直結! ニュートラル・インゲージネット・ワーク再構築! メタ運動野パラメータ更新! フィードフォワード制御再起動、伝達関数! コリオリ偏差修正! 運動ルーチン接続! システムオンライン! ブーストトラップ起動!」

キーボードを叩くキラの手が更に加速し、OSを書き換えていく。表示されているOSに新たなルーチンを組み込んで、その潜在能力を引き出すための時間。

ナチュラルには難しくても、キラには造作も無い行為だった。

「このおおお…」

ジンがゆっくり立ちあがり、中にいるミゲルは突然の変わりように舌打ちをする。それがマグレであっても、コーディネーターであるプライドを傷つけられたことには代わりが無かった。

しかし彼は、もう一つの機影に目を向けることを怠っていた。

「キラから離れるお!！」

エンジンを全開にして、腰から抜いたビームサーベルでジンの両腕を切り裂いた。

「なにいい!?!?!」

ミゲルにしてみれば、想定外の事ばかりが起こっている。たかがナチュラルごときに、MSは扱えない、その油断がリオンの攻撃を許したのだ。

しかし、気づいたところでもはや手遅れであった。

ファントムにコックピットをビームサーベルで突きつけられているミゲルにはもはや、自爆か拘束されるの二択しか残されていないかった。

side out

「このっ！」

その頃、ムウ・ラ・フラガのゼロは2機のジンを相手に宇宙を駆け回っていた。有線ガンバレルが展開され、ジンのマシンガンを持った右手を打ち落とす。ムウはそのままリニアガンで剣を持つとした左手を打ち落とした。だが、先程からジンに翻弄されている友軍のメビウスも、もう一機のジンの剣に切られ、爆発した。

「この戦力差では…どうにもならんか!？」

くそ、やばいぞこりゃ…不利なのはかわらない。だが、

「俺は不可能を可能にする男だぞ。」

彼の闘志はまだ燃えていた。

「ミゲル機大破！ シグナル、ロストしました！」

ヴェザリウスのブリッジに驚愕を含んだオペレーターの声が響いた。その声は皆に聞こえ、ブリッジクルー全てが信じられないといった表情を露にしている。

ザフトのMSが、大した戦線でもないのに大破を被るなど、予想だにしていなかったからであろうか。

それとも、奪取作戦に参加したエリート達の二期上のベテランだったからであろうか。

「ミゲルの機体が大破だと!?! たかがこんな作戦で…！」

MSにジン一機を大破させられたことに動揺を隠しきれないアデス。敵側に『エンディミオンの鷹』と言うエースパイロットがいるとは

思わなかったのだろう、その額には汗が浮かんでいる。

「ふむ……どうやらいささか五月蠅い蠅が一匹飛びまわっているようだな……」

シートについて悠々と戦局を見守っていたクルーゼが苦々しく呻き、ゼロの表示されたモニターを恨めしく睨んだ。ギリツと噛み締めた歯、マスクをしていても普段の余裕の在る雰囲気が消え去っている。

「は？」

「蠅を落としてくる、私のシグーを用意しろ！」

聞き返すアデスに、強い口調で命令を下すクルーゼ。苛立たしげなその言葉を、彼自らが出撃するのだと解釈するまで、アデスは少々時間を要した。

「ミゲルを倒すとはな……それほどまでに動いているとなれば……」

言葉尻に少々怒気が含まれていく。

そして、クルーゼはシートから立ち上がり、モニターを背に歩き出した。

仮面の下には、喜びとも、恐怖ともつかない表情を浮かべて。

「最後の二機……そのままにはしておけん」

クルーゼは苦々しい表情をそのままに、ブリッジを後にした。

同じ頃シャフトの一角、爆発に巻き込まれたナタル・バジール少尉は死人からぶつかられる事によって起こされた。彼女は先程、爆発が起こる前『アークエンジェル』と言う船を出て、外にいるはずのマリユール・ラミアス大尉を呼び戻すためにシャフト経由の移動ベルトでコロニーに入ろうとしていた。

しかし、その狭い空間、シャフトの中に爆発の余波、爆風が黒煙を伴い凄まじい勢いで叩きつけたのだ。

とっさに頭部を庇い、身を丸くしたナタルは運良く難を逃れたが、目の前にいる死人はそうも行かなかったようだ。死人は大量の血を流しており、当たり前だが息はない。押し寄せる不快感に口を押さえながらも、彼女は使命を忘れなかった。

「……艦は……アークエンジェルは……!?!」

先程まで共同の職場にいた者達は既に事切れており、その場で生きているのはナタルだけだった。ナタルは船の安否を確かめるため、シャフトを後にした。

外では、Gのパイロットを運ぶために使われた輸送船が港から出て応戦中だった。しかし、ジンからエンジンに直撃を受け、呆気無くヘリオポリスの外壁に接触し、爆発、飛散した。

コロニーの崩壊がさらに加速してゆく。

side out

宇宙空間に緑、青、赤の撤退信号が照り、ジンは引き上げを始めた。

「引き上げる……だが、まだ何か……これは!?!」

その中途半端な行動に、ムウ・ラ・フラガは疑問の声を上げる。損傷しているとはいえ、MSの戦闘能力には自走砲などで太刀打ちできない。一機でもコロニー制圧し蹂躪することが可能なはずである。何かに気づいたように踵を返しコロニーの方向に戻るムウ。

時を同じくしてクルーゼもMS『シグー』を駆り宇宙空間を疾走していた。ノーマルスーツを着ないことから、絶対勝利への自信が強く、それほどまでの腕前が察せる。

「私がお前を感じるように…お前も私を感じるのか？」

喜びとも、苦渋ともつかないその言葉には言葉では言い表せないほどの因果が含まれていた。

「不幸な宿縁だな…ムウ・ラ・フラガ……！」

クルーゼの顔には、複雑な表情を無理やりにも隠す銀色のマスクが鈍く光っていた。

シグーの接近をいち早く感知したムウはライフルの狙撃をかわしガンバレルを展開し四方からラウ機を狙った。

「お前はいつでも邪魔だな、ムウ・ラ・フラガ！もつともお前にも私のご同様かな！？」

「貴様！ラウ・ル・クルーゼか！」

クルーゼはリニアカノンの弾丸をすり抜け、ムウのゼロに銃を一発放ち、ヘリオポリスに侵入した。

その様子を見て、有線ガンバレルを収納したゼロのコックピットにいるムウは忌々しげにそのスラスタの尾を睨んだ。

「ちっ！へリオポリスの中に！」

ムウは言うより早くブースターを吹かし、急いでその後を追っていた。先程、宇宙空間を飛んでいくザフト製ではないMSを4機確認した。今回の護衛任務でのパイロットの頭数は6人。すなわち、後二機はへリオポリスの中に居ることになる。

くそっ！！ やらせないぞクルーゼ！！！！

ピキーン！！

え？ なんだ！？ クルーゼじゃない……これは……まさか！

まだ……まだコロニーの中にいるのか！？

リオン！！！！

ガンダム（後書き）

リオンの正体は、物語の根幹にかかわるのでお答えできません。

おそらく、なんじゃこりゃあ、というものですな。SEEDでは出生と祖先の話、もしかしたら祖先のことは種デスになるかもしれない。

アークエンジェル（前書き）

アークエンジェル登場！　それと、リオンの機体について説明します。

機動力は、フリーダム以下で、GATシリーズ以上。フリーダムはキラが言うには、四倍以上の性能らしい。『最初に乗り込む時にはやいたような気が……。』ですが、あくまでストライクの発展機なので、1.7倍です。二倍はやりすぎなので。

汎用性は、ストライクと同レベルですね。形はよくにているので。

アークエンジェル

side out

瓦礫が漂うシャフトの中で、地球連合軍のナタル・バジール少尉は必死に生存者を探していた。

しかし、一向に生きている人間は見当たらず、逆に数多くの遺留品がナタルの目に止まる。

瓦解していったと思われるシャフトの内部には、奇跡的に酸素が残っている。先程まで一緒にいた者達も、所在がわからない。そんな戦争に巻き込まれた中立コロニーの悲惨さを嘆くことも忘れて、彼女は一心に暗闇に声を投げた。

「誰か…誰か居ないのか！」

叫んだ後、ナタルの目に飛びこんできたのは士官用の帽子…それを胸に抱え、ナタルは襲撃された時に何も出来なかった己の身を呪った。そして、自分を攻めれば攻めるほど目尻に涙が溜まっていく。

「くそっ……生き残ったものは！」

ボロボロの帽子を抱え、誰も居ない空間に悪態をつき、震える瞳で見つめる先に、返事があると期待していた訳ではない。自分の声しか聞こえない虚しい空間にナタルは一人、孤独に蝕まれていった。

ガン、ガン、ガン、ガン……

何処からか物音が聞こえてくる。音のした方向を見ると、ちょうど開かなくなつたドアを蹴破り、一人の男が入ってきた。

その地球連合軍の制服を着た男は、ライトを持って同じく生存者の確認をしているようだ。男にいきなりライトを向けられ、眩しさに目を思わず閉じるナタル。

「バジール少尉！ご無事で！」

人がいること、ただそれだけなのに、ナタルの心は解れていく。その声に、普段厳格な表情も安堵に変わるのだった。

side out

ヘリオポリス内、今だにアラートの鳴るエリアにキラ達は居た。

ストライクとブレイドはフェイズシフト・ディアクティブモード（

PS装甲無稼動状

態）のまま、膝をついている。

ジンのパイロットは拘束し、目の届く場所においている。今の彼は、おとされたことがよほどショックだったのか、呆然としていた。

キラは負傷したマリューを手当てするために、被害の少ない公園のベンチにマリューを横たえさせた。

その間、カズイ、サイ、トール、ミリアリアと協力し、マリューの介抱を進めていた。

「・・・うぐー！」

痛みで目がさめるマリュー、しかし、お世辞にも爽やかな目覚めと

は言えない。目を開けたその先は焼けた土と人工物らしき面影を残すものがあつた。その中で、背景に溶け込んでいない物…そう、人が居た。

「あ……気が付きました？キラ〜！」

キラと呼ばれた少年が少女の声を聞き二人のもとへと駆け寄ってきた。その声を聞いて右手を額にやろうとするが、負傷しているのを忘れていたため、腕に激痛が走った。

「ぐっ……！」

「まだ動かない方が良いでしょう。でも、傷の具合は思ったより浅くて良かったですね」

純粹にマリユートを気遣っている気持ちがマリユートにもひしひしと伝わってくる笑顔だった。

「すみません…僕…色々と勝手なことをしたみたいで…」

まだ火照った体が重く、傷口の塞がっていないマリユートは、自分が横たわったまままだ
という事実が、酷くもどかしい物だった。

本当なら、銃を向けてしまったこと、突然MSに押し込んだことを謝罪しなければいけないのにね……

「お水…要ります？」

気まずい雰囲気を晴らそうと思ったのか、少女が水の入ったボトル

をマリユールに差し出す。

「……ここは厚意に甘えましょうか……」

「……ありがとう。」

そう言つて上体を起こそうとするが、上手く行かない。もう一人のガンダム操縦者の少年に背中を介添えしてもらい、私を起こしてくれた。

ボトルを受け取つたマリユールは、開いているキャップに口をつけた。

「すっげえくさな、ガンダムっての」

「動く？動かないのか？」

非常事態とは思えない声が響いた。

え？

声が出た方向を見ると、少年二人がストライクに乗っている。片方はコックピットに入り、操縦桿さえ握っている始末。

「お前等、勝手に弄るなつて！」

眼鏡の少年が二人を制するが、二人は興味津々と言つた感じで聞く耳を持たない。

「でもなんでまた灰色に戻つたんだ？」

「メインバッテリーが切れたんだとさ」

少年たちが何やら話しているようだ。ストライクはまだ充電、装備

が十分でなく、そのためエネルギーも早く切れてしまったのだ。

「その機体から離れなさい!!」

恩人とはいえ、機密に関わってしまった以上、不本意だけど彼らを巻き込まざるを得ない・・・

とはいえ、体がうまく動かない。本来子供が乗るべきものじゃないのに・・・

「トール！ カズイ！ 早く降りろ!! これは兵器だぞ!!」

隣にいた少年が厳しい声で叫んだ。

「え、ああすまんリオン・・・勝手なことをしちゃって・・・」

「わ、悪かったよ」

二人はリオンと呼ばれた少年に従い、ストライクから降りた。

「助けてもらったことは感謝します・・・でもアレは軍の重要機密であり・・・民間人がむやみに触れて良いものではないわ」

そう、それはそれ、これはこれなのだ。確かに彼らは恩人だ。でも・・・

「皆・・・こっちへ。」

元々自分達が不甲斐なかったから起こった不測の事態だ。彼等にも責任は無い、むしろ、ザフト兵に撃たれて、コックピットに無理や

りキラを押し込んだ自分に非がある。それは解っていた。

「一人ずつ名前を……」

確かに心苦しいものはある。

戦争には干渉しない中立国のコロニーに、連合軍が入っているなど。だが、そうでもしなければ今までの行程は無かっただろう。

皮肉にも、ロールアウト前というところで強奪はされてしまったが、せめて二機だけでも……と。

彼女は氏名を強制した。

渋々ながらもそれに従う一同。

「サイ・アーガイル」

「カズイ・バスターク」

「トール・ケーニヒ」

「ミリアリア・ハウ」

「リオン・R・フラガ」

「キラ・ヤマト」

side out

「私は、マリユー・ラミアス、地球連合軍の将校です。申し訳ないけど、あなた達をこのまま解散させるわけには行かなくなりました」

厳しい表情を崩さぬまま、与えられた台詞を述べるように、淡々と言うマリュー。

「事情はどうあれ、軍の重要機密を見てしまったあなたは、然るべき所と連絡が取れ、処置が決定するまで、私と行動を共にして頂かざるを得ません。」

「そんな！」

「冗談じゃねえよ、なんだよそりゃあ！」

トール、カズイが上ずった抗議の声を上げるが、そんな言葉は意味を成さなかった。軍人と、民間人。はたから見れば、脅迫、拉致とも取れる方法。彼等が恐怖心を抱くほうが普通だ。

「従ってもらいます！」

強い口調で、マリューが言う。

「僕達は・・・ヘリオポリスの民間人ですよ！中立です！軍とかなんとかそんなの・・・なんの関係もないんです！」

サイが叫んだ。今まで、平和だと思っていたヘリオポリス。現在では、見渡す限りの焼け野原。避難が遅ければ、怪我人だって出るし、死人だって出る。彼の言葉は正論なのだが、マリューは耳を傾けない。

元々戦争を終わらせるために軍人になったのだ。自分ひとりで戦争

が終わると思えるほど自惚れてはいないが、それでも、Xナンバーは確かに戦争の鍵を握っている。ジンが使うM69バルスス改・特火重粒子砲とは比較にならない位小型の携帯ビーム兵器。

このデータがザフトに齎されてしまえば、瞬く間に連合は負けてしまっただろう。

そんな彼女の思いを知って知らずか、カズイとトールは非難を続けた。

「そつだよ!」

「大体、なんで地球軍がヘリオポリスに居るわけさ、そつからしておかしいじゃねえかよ!」

「そつだよ!だからこんな事になったんだろ!」

次々に非難を浴びせるカズイとトール、そもそも中立国のコロニーに軍が入ること自体おかしいことなのだ。

「二人とももうよせ! . . . 彼女に言っただってもう無駄だ。上が決めたことを一兵士に言っただってどうしようもない . . . 」

連合の機密を知ってしまった以上、彼女が俺たちを自由にすることは立场上不可能だ。

「でもよお . . . 」

「カズイ . . . 彼女だから運がよかったけど、その発言はアウトだぞ。下手をすれば俺達は殺されていた . . . 」

その単語に黙ってしまうカズイ。

side out

ドック内、

爆発に巻き込まれ、瓦礫という巢の中、その白い装甲を煤で汚した新造戦艦。「アークエンジェル」はひっそりと息を潜めていた。

「無事だったのは、爆発の時、艦に居りましたほんの数名だけです・
・ほとんどが工員ですが」

「状況は、ザフト艦はどうなっている？」

「わかりません、私共もまだ周辺の確認をするのが手一杯で……」
ナタルがブリッジに入る、電源は落ちていて、少し薄暗かった。そして、ナタルはアークエンジェルの電源を入れた。エネルギーの流れから来る音が艦全体を伝い、響き渡る。

「流石はアークエンジェルだな、これしきのこと沈みはしないか……」

何処か安堵の表情で言うナタル。それもそのはず、アレほどの大爆発でも耐えぬいたのだ。新型のラミネート装甲の強靭な強度、それを今ほどありがたく感じたことは無かった。

「しかし、港口側は瓦礫が密集してしまっています、完全に……閉じ込められました。」

後から付いて来るまだ若い下士官の現状報告を耳で聞きながら、ナタルは外部との通信を計るために回線を開く。しかし、電子妨害がまだ続いており、モニターには耳障りなノイズが響いた。

「まだ通信妨害されている？だが…ではこちらは陽動…？ザフトの狙いはモルゲンレーテと言うことか？」

途端にナタルの顔が悔しさに染まる。上唇をかみ締め、シートのクッションを握り締めた。ここまでMSの開発に力を注いできて、完成したところで横取りされる。良いように利用された…と、怒りの感情が沸々と湧き上がってきていた。

「くそっ！あちらの状況は！？『G』はどうなったのだ！？これでは何もわからん！」

ナタルがモニターを睨みつける。すると、砂嵐を呈するモニターから、ノイズ以外の音声が伝わってきた。

<…・ちら…・105ストライク…地球軍…応答請う…>

はっとして二人は顔を見合わせ、「G」がまだ無事だと言うことを確認する。そして、その声が少年少女のものだということも驚きだ。

「こちらX105ストライク、地球軍応答請う！」

キラ達がノイズの向こうに向かって叫ぶ。しかし、いつまでたっても返事はない。

「地球軍、応答請う！」

返事の返ってこない通信に望みを捨てたのか、キラ達は溜息をついた。

狭いMSのコックピットの中でインカムをとり、シートに肩を落としました。

そんな所に1台のトレーラーが着き、中からサイが出てきた。サイはマリユーに対する警戒を解いていないようで、不貞腐れた様な素振りを見せる。

「ナンバー5のトレーラー・・・アレで良いんですね？」

サイが後のトレーラーを親指で指した。その先には緑色をした大型トレーラーがある。

「ええ、そう・・・ありがとう」

マリユーが負傷した右腕を抱えサイに言った。

「それで、この後僕達は何をすれば良いんです？」

「ストライカーパックを、そしたらキラ君、もう一回通信をやってみて？」

「分かりました」

キラはコックピットの中で、点滅を繰り返しているモニターを見て、答えた。

荒れ果て、瓦解したコロニーから眼をそむけるために。

side out

「くっ！こんな所で！」

シグーがマシンガンを連射しながら高速でゼロを牽制する。ムウがそう愚痴を垂れるのも無理はない。

ここはヘリオポリスの支柱の役割を果たす部分で、ここが壊れたらヘリオポリスも崩壊することを意味しているのだ。

ここでリニアガンはマズイ・・・

その隙をついたのか、クルーゼはゼロの死角に入った。入り組んだ空洞で展開されているこの戦闘は、一進一退。

「この辺で消えてくれると嬉しいんだがね…ムウ！」

それはこっちのセリフだよ！！

死角から飛び出したシグーはゼロに向かってマシンガンを放つ。しかし、ムウはブースターを使ったが有線ガンバレルをうち抜かれ、舌打ちした。そのガンバレルを放棄し、ムウは後退しながらリニアカノンを撃った。

「艦を発進させるなど…この人員では無理です！」

下士官、アーノルド・ノイマンが文句を言うが、当のナタルは聞く耳を持たない。元々工員だった自分達、そして満足な経験も無い自分達では当たり前な反応だ。

「そんな事を言っている間にやるにはどうしたら良いかを考える！」

ブリッジの中、艦長席に座ったナタルは顔を引き締めた。

「モルゲンレーテはまだ、戦闘中かもしれんのだぞ！」

ナタルが艦長席の機器類を調整しながら言う。

「それをこのまま、ここにこもって見過ごせとでも言うのか!？」

ナタルがそう声を張り上げている時、入り口から3人のクルーが入ってきた。

「連れて参りました！」

眼鏡をかけた男、チャンドラと、小太りな男ロメル・パルを連れた黒髪の男性ジャッキー・トノムラがナタルに言う。それを聞いたナタルは三人に向き直り、檣を飛ばした。

「シートにつけ、コンピュータの指示通りにやれば良い」

実戦経験のあまりない人間に無茶を言うナタルにいらついたのか、ノイマンはナタルに抗議した。

「外にはまだ…ザフト艦がいます。戦闘など…できませんよ！」

何処か投げやりな抗議に腹を立てるナタル。

「わかっている…！艦起動と同時に特装砲発射準備…できるな、曹長！」

渋々ノイマンはシートにつき、コンソールを叩き始めた。

「発進シーケンス、スタート、非常事態の為、プロセスC30からL21まで省略、主動力、オンライン」

そこにいる全員がキーボードを叩き、モニターに様々な映像をだす。

「出力上昇異常無し、定格まで…450秒！」

「長すぎる！ヘリオポリスとのコンジットの状況！」

「生きてます！」

「そこからパワーを貰え！コンジットオンライン、パワーをアキュブレターに接続

！」

「接続を確認、フロー正常、定格まで20秒！」

「生命維持装置異常なし」

「CICオンライン」

「火器システム、オンライン」

「FCSコンタクト！」

「磁場チェンバー及びペレットディスペンサー、アイドリング正常」

「外装衝撃ダンパー最大出力でホールド！」

「主動力コンタクト」

「エンジン異常無し！」

「アークエンジェル全システムオンライン、発進準備完了！」

今ここに、全ての発進準備が整い、アークエンジェルは微妙な振動を始めた。それは船体が浮き上がっている証拠。

「気密隔壁閉鎖、総員、衝撃及び突発的な艦体の破壊に備えよ、前進微速：アークエンジェル発進！！！」

アークエンジェルは瓦礫を跳ね除けながら微速を始めた。そして、その特徴的な船体は、まるで外界が歓迎の意を表すようにコロニー入り口に向かっていった。それはただ、ドックの気密隔壁が不完全になってしまい吸い込まれているだけだが、その場にいるものは一同がそう感じていた。

狭いシャフト内では白熱した戦いが行なわれていた。しかし、本来ならば速度制限が出る場所であっても双方とも全速力で戦闘していた。

「ちっ！」

ムウがガンバレルを放ち、障害物をすり抜けながらリニアカノンを放つ。しかし、シグーは持ち前の機敏さを活かし殆どの銃撃を避けていた。

この戦いはエースパイロット同士であるから成り立つのであり、素人が乗っているならシャフトの内壁に当たり自滅するか、相手の攻

撃が当たり落ちるかが関の山だ。それほどまでに二人の空間把握能力や操縦センスは高く、一進一退の攻防を繰り返していた。

突如、シグーが展開されていたガンバレルを踏みつける。シグーが飛びあがった後、ガンバレルは絶妙のタイミングで爆発した。そして、重突撃機銃を構えゼロに向かい銃弾を放つ。しかし、ムウはゼロを障害物の陰に走らせ、上手くやり過ごした。外壁に幾つもの流れ弾が飛んでいく。ムウはクルーゼのシグーに押される形で、ヘリオポリスのモルゲンレーテ地区に後退していった。

side キラ

キラは目の前のトレーラーに混載されている細長い砲状の物を見渡し、困惑の声を上げた。

「パワーパック・・・どれです？」

迷うのも無理は無い、トレーラーのコンテナに収納されているパワーツは数種類あり、どう扱えば良いのか、皆目見当がつかなかったからだ。形状から察するに火器らしく、マリューから聞いた「パワーパック」：バッテリーと想像できる代物は無かった。細長い砲は濃い緑色をしており、先程のマリューの言葉を思い出す。

『ストライカーパックを、そしたらキラ君もう一回通信をやってみて？』

こんなMSなど知らないキラに対し専門用語を羅列するマリューに何処か腹ただしいものを感じたが、敢えて追求はしなかった。説明書無しにプラモデルを組み立てる感覚だ。バッテリー残量が必要最

低限しか残っていないこともあり、無駄な動きは禁物だ。さつさとパワーパックを装備して、とりあえずの稼働時間を確保したかった。先ほどの様に、ジンがまた攻めてくる可能性もある。あるいは、奪取した機体を戦線に投入してくる可能性すら。

「ストライカーパックとバッテリーは一体に成っているの、そのまま装備して！」

マリユールが声を上げた。

「まだ解除にならないのね・・・避難命令」

普段の陽気なミリアリアの声とは違い、今は何故か弱々しい。解除にならないこと、それすなわち、現在も危機が回避されていないということに他ならない。

「親父やお袋たちも…避難してるのかな？」

サイは今朝まで一緒にいた両親の事を気にかけているようだ。

「あゝあ、早く家帰りてえ」

無気力な声を上げるカズイ。だが、次の瞬間、巨大な爆発音がヘリオポリスに響いた。

その音に驚愕した一同は、音の方向に眼を向ける。すると、爆発の炎が煌々と上がっていた。

side out

「ほう・・・あれか」

シャフトの一角を破壊した際の爆炎を貫いたシグーの中、クルーゼは不敵な笑みを浮かべていた。モニターに映るミゲルの機体を撃退した地球軍のMS。その脅威は早いうちに刈り取っておくに越したことは無かった。クルーゼはシグーを反転させ、ストライクとストライクファントムに向かう。ガンバレルを全て破壊されたゼロを引き離して。

「最後の二機か!？」

ゼロはなおもシグーを追いかける。ムウは大地に足をつけているMSを見つけると、驚愕を含んだ声を上げる。MSは灰色に黒ずんだボディを煤に汚して、無防備な姿を晒していた。もう一機は、直立不動のまま、動く気配もなかった。

彼はゼロを懸命に動かし、シグーに攻撃を仕掛ける。有線ガンバレルが全てなくなった今、攻撃手段は一つしかない。クルーゼのシグーを撃破出来る確立は・・・計算したくもなかった。

クルーゼのシグーはゼロのリニアカノンを避けていく。ゼロも追隨するがやはり機動性能の差か、追いつくことが出来ない。巻き起こした風が、サイ達に吹き付けた。

「きゃあ!!!」

思わず悲鳴を上げるミリアリア。強風に煽られた砂が、小さな礫となって身体を打ち付ける。

「装備をつけて、早く!!」

爆音を見て、半ば自失に陥っていたマリューは我を奮い立たせた。ここでストライクとファントムを、最後の二機を破壊されるわけに

は行かない。そう思ったマリューは叫び、トレーラーに向かって走り出していた。

ゼロのリニアカノンが空を裂く。巧みな操縦でシグーはそれをやり過ぎていった。対するシグーもマシンガンで牽制しつつ、ゼロとの距離を詰めていく。間合いに入った瞬間、クルーゼは剣を引き抜いた。

「っ！」

ムウはそれを認めると、リニアガンで打ち落とそうと機体を傾かせる。それを読み、背後に回り込んだクルーゼは狙い通りに剣を振り払う。

「何!？」

重い音が、ゼロのコックピットに木霊する。狙いすまされた一撃は、ゼロのリニアガンの砲身を切り裂いたのだ。バランスを失い、シグーに振り返ろうとするゼロをクルーゼは通り過ぎ、眼下のストライクに照準を合わせる。

「今のうちに沈んでもらう！」

獲物を見据え、クルーゼは冷徹に叫んだ。

side リオン

あのMSにあのMA・・・確証はないけど、まさか兄さん？

リオンは眼下で繰り広げられている高度な空中戦を見ていた。しか

し、MAのリニアガンは、切断され、今度はストライクを狙っていた。

「キラはやらせない!!」

意を決し、敵MSに突撃していった。

一方アークエンジェルでは。

「特装砲発射と同時に最大船速！」

現存する戦艦で、右に出るものは無い砲。特装砲、ローエングリンのエネルギーをチャージしていた。

一刻も早く、通信で助けを求めているX-105ストライクを助けなければならぬ。

開かれた砲身が迫り出し、エネルギーが満ちていく。空気を切り裂く音が聞こえたかと思うと、ローエングリンが発射され、眼前の瓦礫を吹き飛ばした。

「何・・・？」

「何が・・・？」

突然、空を切り裂いた放火に、クルーゼとリオンは一切の行動を止めてしまう。突き抜けた、力有り余る砲火は対面のコロニー外壁を破壊する。瓦礫を吹き飛ばされた港からは、見慣れぬ白い物が飛び出していた。

「・・・・・・・・」

それは巨大な戦艦だった。

リオンはその大きさと形の異質さに唖然としていた・・・

アーケエンジェル（後書き）

死には行ってますね。彼は・・・ラウさんに突っ込むとは・・・

さらばヘリオポリス（前書き）

今回はムウさん達と合流します。 更新が遅れ、すみません
でした。

さらばヘリオポリス

side リオン

「なんだあれは・・・戦艦か!？」

にしては、なんだこれ？ 白やら赤やらとんでもなく派手だな・・・

リオンは、呆然としながらも動きを敵MSにトーデスシュレッケンで牽制射撃を行う。

しかし敵は弾幕を躲しながらファントムに実体剣を抜いて斬りかかってきた。

ピキーン!!

「そんな攻撃で・・・!!」

リオンも負けじと腰からビームサーベルを抜いて鏢迫り合いに持ち込む。だが、リオンは知らないが相手はあのラウ・ル・クルーゼなのだ。いかに機体性能に差があつたとしても、彼はMSをまだ動かしたばかりの素人・・・

しかしその道理が通るのは、彼が普通の素人であつたらん話だ・・・

「誰だか知らないが、キラは討たせない!!」

鏢迫り合いのなか、リオンはビームサーベルをわずかに横にずらしながらブーストをかけ、敵MSの片腕を切り裂いた。

side クルーゼ

目の前の機体に乗っているのは、本当に民間人か？ とても素人が乗っているとは思えんな・・・

「だが、隙だらけだな・・・」

私はジグーの片腕と引き換えに、あの黒い機体の死角に回り込み、背中を蹴り飛ばした。

「ぐああ!?!」

衝撃に耐えられず、地面に落下してゆく黒い機体・・・性能はいい、センスを感じた・・・だが、戦闘経験はない素人・・・なに!!

地面に叩きつけられるだろうその黒い機体は反転しながら体勢を立て直し、地面に降り立った。

まさか、ナチュラルにこれほどパイロットセンスを持つものがいたとはな・・・だが、

黒い機体は、こちらに攻め込む気配がない。どうやら先の衝撃が相応こたえたようだな。

しかし、私とてここに長居するのは愚策かな・・・得体の知らない戦艦に、もう一機の最新鋭MS・・・こちらは片腕を不覚ながら奪われてしまった・・・

「ここが潮時だろうな・・・」

戦艦から繰り出される緑の閃光が私に迫るが問題ない。あの程度の砲撃には当たらんよ。

ラウ・ル・クルーゼは、戦艦から繰り出されるビームや弾幕をあざ笑うかのように余裕で避け、速やかに母艦へと帰投するため、現宙域を離脱した。

アスラン・ザラは奪取した機体でヴェサリウスに向かう途中だった。
……キラ……。

さきほど爆炎の照り返しの中で見た顔が、目の前にちらつく。大きく目を見開き、その口は確かに「アスラン？」と動いたように見えた。まさか……こんな所でかつての親友と再会するなんて。

「いや……あいつがあんな所にいるはずが……」
否定しつつ、心の奥底では確信していた。

俺がキラ・ヤマトを見間違えるなどありえない。
と、その時通信が割り込んできた。

……被弾した。帰投する。

クルーゼ隊長が被弾？ いったいなにが起きたんだ？

side out

「ラミアス大尉！」

格納庫には、大勢のクルーが集まってきていた。その中にいたナタルが、マリユーの姿を見とめ駆け寄ってくる。その後ろを遅れてついてくる下士官たち。

「……無事で、何よりです！」

敬礼。

そんなものをしたのが大分久しぶりに思えた。マリユーも同じく敬礼で返し、ほっとした顔で応じる。

「あなた達も・・・、良くアーケエンジェルを。お陰で助かったわ。」

マリユー・ラミアス本来の顔に戻ったのか、無事を喜ぶ顔は優しかった。そして、ストライクとファントムのハッチが開き、キラとリオンが機体から降りてきた。

「ラミアス大尉・・・これはいつたい・・・？」

ナタルが困惑の声を上げた。

中に入っているのはトップガンであるGのパイロット。そう考えていた彼女にとって、今コックピットから降りてきた青年達は不可解だった。

一人の服は気取らないラフな服装のように見えて、ファッション性も悪くは無い。顔は東洋系の整った顔立ちで、アメジストの瞳を持つ眼は切れ長で、黒髪は男性にしては長め。

ナタルはその容姿を記憶に符合させていく。

もう一人も普通の格好をしていて、端正な顔立ちをした、天然パーマが少し入った金髪の少年。眼光は鋭く、黒髪の少年より男らしい雰囲気だった。

「あー・・・感動の再会を邪魔して悪いんだが・・・え？」

突然、横合いから聞きなれぬ声が届いた。

その方向を見ると、紫と白、黒のパイロットスーツを纏った金髪蒼眼の男が歩み寄ってきていた。

容姿は整っているが、それにやけた顔・・・ではなく、驚愕した顔が台無しにしまっていた。短めの金髪も、汗のせいで少々くすんでいる。

男はマリユートの手前まで来ると、そのままのスタンスで口を開いた。

「・・・地球軍、第七機動艦体所属、ムウ・ラ・フラガ大尉、よろしく。」

敬礼をして見せるが、何処か不真面目な感じを受ける。それと同じく、マリユートとナタルもそろって敬礼した。

「第二宙域、第五特務師団所属、マリユート・ラミアス大尉です。」

「同じく、ナタル・バジルール少尉であります。」

二人の名を聞いて、ムウと名乗った男は敬礼をとく。

「乗艦・・・許可をもらいたいんだがね、この艦の責任者は？」

彼こそ、先ほどシグーと戦った彼専用MAメビウス・ゼロのパイロット。エンディミオンの鷹と名高い連合軍のエースパイロットだ。彼は血のバレンタインでMA隊の長を務め、月のエンディミオンクレーターで戦功を上げたことからその字を受けたのである。

「・・・艦長以下、艦の主だった士官は皆、戦死されました。よって今はラミアス大尉がその任にあると思います。」

重い口を開き、ナタルが歯切れ悪く言った。

「え・・・」

「無事だったのは、艦にいた下士官と、十数名のみです。私はシャフトの中で、運良く難を逃れました……」

「艦長が……そんな……」

愕然とした顔のマリユー。

1時間前に、別れを告げたのが最期となってしまうなどとは、考えてもいなかったのだから。

「やれやれ、なんてこった。ああ、ともかく許可をくれよ、ラミアス大尉。俺の乗ってきた船も落とされちまってね。」

やはり、飄々とした口調で髪を弄りながら呟くムウ。

ここで、ヘリオポリスに入った時の予感が当たってしまったということ思い出した。悪い予感はしていたが、虎の子のMSを掠め取られるとは大層な皮肉。まさに「鳶に油揚げを攫われた」とはこのことだ。

「ああ、はい。許可します。」

それを聞くと、ムウはキラ達の前に歩み寄った。

「まったく……皮肉なもんだな……」

彼は苦々しい顔で、キラ達の前に進み出た。

「な、なんなんですか？」

「……………」

ムウは唐突に口を開いた。

「……………どうしてお前があれに乗っているんだ……………リオン？」

side リオン

ムウの言葉に、その場の空気が凍りついた。

リオンはムウを見つめ返す。キラ達はその言葉に驚いて、リオンを見つめる。ラミアス達も彼を見つめた。

「ヘリオポリスの混乱に巻き込まれて……………成り行きで乗った。」

「……………そうか……………そして、もうひとりの君は……………コーデイナーだね？」

とたんに、マリューとナタルの背後に控えていた兵士達が、銃を構えた。

銃口はキラを狙っている。

この戦争はナチュラル対コーデイナーだから無理もない状況かもしれない。

だけど……………」

「……………なんなんだよ！それ！」

トールが叫び、かばうようにキラの前に出た。

「コーデイナーでもキラは敵じゃない！ザフトと戦って俺達を守ってくれただろ！？あんたら見てなかったのか？」

彼はキラに向けられた銃口を睨みつけ、一戦をも辞さないという様

子で必死に訴えた。するとリオンがツール達の前に出て、ムウの前に立つ。

「キラに手を出さないでくれ兄さん。キラはザフトとは無関係だから……」

「そうなのか？」

ムウがリオンに質問した。

「え！？ この人……リオンの兄さんなの！？」

キラが目を見開いて、リオンに尋ねる。あ、みんなには言ってなかったな……

「そうなの、リオン？ あなたのお兄さん、軍人だったんだ……」

ミリアリアが驚きながらこちらを見る。……てか、そんなに見ないでくれ……

「大分年は離れてるけど……兄さんだよ……兄さん、お願いだから……」

「そうか……なら、銃を……銃を下ろしなさい……」
ムウではなく、マリユールが命じた。

「そう驚く子とわないでしょう。ヘリオポリスは中立国のコロニーだった。戦火に巻き込まれるのが嫌でここに移ったコーディネーターがいたとしても、不思議じゃないわ」

「いや、悪かったな。とんだ騒ぎにしちゃって」
と、その騒ぎを引き起こした張本人が、悪びない調子で言った。

「兄さん・・・」リオンは、彼のそんな調子に少し困惑していた。

「俺はただ聞きたかっただけなんだ。ここに来るまでの道中、『G』のパイロットになるはずだった連中のシミュレーションを結構みてきたからさ。やつらノロクサ動かすのも四苦八苦してたんだぜ」

ムウはちよつと肩をすくめると、きびすを返した。

「それをいきなり、あんな簡単に動かしてくれちまうんだからさ」

それは俺にも言えるはずだが・・・

ラミアス大尉、バジール少尉！至急ブリッチへ！

side out

「どうした!？」

MSですっ！

身を固くしたマリユーの背中を、ムウが叩く。

「指揮を執れ！君が艦長だ」

「わ、私が・・・!？」

「だろ？先任大尉は俺だろうが、この艦のことはわからん」

マリューとナタルは一瞬顔を見合し、

「アーケエンジェル発進準備！総員第一戦闘配備！ストライクはパツクを！ファントムは急いで補給を！」

「行くぞ、キラ」

「え・・・あ、うん・・・」

キラとリオンは急いで自分にMSに乗った。そして、艦内に警報が響き渡った。それを聞きながら、ミリアリアがそつとつぶやいた。

「キラとリオン・・・大丈夫かしら」

「信じるしかないだろ・・・俺たちは・・・」

トールが強く、その肩を抱いた。サイ達は、ただ彼らを見守ることにできない。

激しい爆音がコロニーを揺さぶった。

隔壁に新しい穴が空き、そこからジンの編隊が侵入してきた。

side out

それぞれ大型のミサイルランチャーや特火重粒子砲を装備したジンをモニターで捉え、艦橋のCICに入ったムウが毒づいた。

「拠点攻撃用の重爆撃装備だと！？あんな物をここで使う気か？」

敵も相当あの二機に固執してるなおい・・・それにしても、なぜリ

オンがあれを扱えたんだ？

編隊のあとから、一機、きらりと赤く光る機体が見えた。情報を分析していたトノムラが、息をのむ。

「い……一機はX303……イージスです！」

奪取されたXナンバーの一機だ。艦橋に重苦しい空気が流れた。自分達の造り上げたモビルスーツに攻撃されるとは……。

「もう実戦に投入してくるなんて……！」

早すぎだろ……おい……俺の機体はまだ修理中で、あいつらだけに戦わせるとは……

マリューは苦々しくつぶやき、拳を握り締めた。するとムウがあっさり言い放つ。

「今は敵だ！あれに沈められたいか？」

「コリントス発射準備！レーザー誘導、敵に！」

CICのナタルの指令にかぶせ、マリューが命じた。

「フェイズシフトに実体弾は効かないわ。主砲レーザー連動、焦点拡散！戦闘ではコロニーを傷つけないよう、留意せよ。本艦はヘリオポリスからの脱出を最優先とする！」

ストライクのキラは破壊されたモルゲンレーテでストライクのパーツを探していた。

「ソードストライカー……剣なのか？」

十五・七八メートル対艦刀シユベルトゲベル、実刀、レーザー刃を兼ね備えた、戦艦の装甲さえ切り裂く強度を持つ、接近戦用の装備である。だが、

「こんな大振りの剣じゃ、MSに当たらない……」

キラは苦々しく思いながらストライクを駆り、高くジャンプさせた。そしてキラに向けて二機のジンが大型のミサイルで撃ってきた。ロックオンの警告がコクピットに響き、キラはあわてて回避行動をとった。ミサイルは、とっさに回り込んだアキシアルシャフトに命中する。シャフトは、まるで紐のように引きちぎられ、宙をたうつて落下した。

「くそ……！」

「最後の二機の一つ……落とすぞ！」

「了解！！」

そのころファントムはアークエンジェルに発射されるミサイルを全て迎撃し、イーゼス、ジン三機にトードスシュレッケン（以下バルカンと表記）で牽制し、隊列を乱そうとしていた。

「アスラン、奴の後ろに回りこめ！挟み撃ちでやるぞ！」

「……わかった」

・・・キラ・・・

「了解!!」

ファントムに向かって襲いかかるジンは、火粒子砲を構えたまま突進していった。それに続き、後ろの二機は、ファントムに攻撃し、先行したジンを援護している。

リオンは、火粒子砲の攻撃を避けながら、ビームライフルで反撃し、先行したジンの火粒子砲に命中させ、両足をビームサーベルで切り落とした。

「ぐわああ!!」

落下する僚機。その手際の良さに、アスランは、見方を変えた。

あれは、もう素人じゃない・・・MSに乗ったばかりですぐに戦闘ができるなんて・・・

「な、何いいい!?!」

「ナチュラルが!! 討ち果たしてくれ!!」

ジンのパイロット達は僚機が撃墜されたことに憤り、火粒子砲とミサイルを発射しながら、ファントムに襲い掛かる。

「前が出るな!! 迂闊すぎだ!!」

しかし、その言葉もはや意味はなく、ファントムは最小限の動きで、ビームを躲し、ミサイルをバルカンで迎撃した。

そして同時に一気に距離を詰め、二刀のビームサーベルで二機を同時に撃墜した。

「うわああああ!!」

「馬鹿なああ!!」

そして同時に爆散する二機。・・・こいつはここで始末しないと・・・
そこへ、ストライクがやってきた。

・・・あの機体には、キラが乗っているかもしれない・・・

side キラ

キラは後ろを見た。そこには見覚えのある赤い機体がいた。

「あのモバイルスーツ・・・!!」

あの時モルゲンレーテから飛び立った機体だ。アスランと出会った直後に・・・

。。。
いいや、あれはアスランじゃない。アスランが平然と人を殺したりするわけがない。

つよく首を振って否定しようとしたキラだったが・・・

キラ・・・キラ・ヤマト!

無線から入ってきた声に、はっと目を上げる。

「アスラン？……アスラン・ザラ！？」

やはりキラ？……キラなのか？

空中で向き直る両機……しかし、最初に撃破したジンが、最後の一本のアキシヤルに激突、爆散し、シャフトにあたってしまった、シヤフトは炎の尾を引きながら地表に倒れ、衝撃でコロニー全体が軋み声を上げる。

アスラン？……アスラン・ザラ！？

side リオン

「キラ！？」

三機のジンを手早く撃墜した後、俺は空中で微動だにしないストライクと赤い機体……確かイージスだったか……に戸惑っていた。

それよりも戦闘に参加し、いきなり三機も撃墜したことにリオンは少し罪悪感を感じていた。だが、やらなきゃやられる。俺たちが倒された後、みんなが殺される……。そんなことにはさせない。だから俺達は、生き残らなきゃいけないんだ。

あの機体のパイロットは……キラの知り合いなのか……それでも俺は……敵の命を奪うべきなのか？

そうなれば……キラは悲しむだろうな……

俺は両者の間に割って入ることはできなかった。

最前から大きく軋み、過負荷に耐えて身をよじるように揺れていたセンターシャフトが、ついに崩壊をはじめた。轟音を立てながら、コロニーの背骨とも言つべきシャフトが分解をはじめた。

ヘリオポリスは凄まじい勢いで亀裂が広がり、その瞬間、真空の暗闇がぼつかりと口を開ける。

その亀裂に引きずり込まれる両機・・・

「くそっ！ 何やってんだあいつら!!」

リオンもスラスターをきかせながら亀裂に突入した。

さらばヘリオポリス（後書き）

今回は原作通り、キラがポッドを見つけてます。
まだまだ話数は少ないですが、頑張っていきます。

「われからのこと」(前書き)

もう一つの作品はまだ時間がかかるようである……
「われらの話をよんで」。

いれからのこと

side キラ

X105ストライク、応答せよ

通信はさつきから、同じ呼びかけを続けている。コックピットの中ではキラのせわしない呼吸音だけが聞こえていた。

ヘリオポリスが……崩壊していく……。

ついさつきまで踏みしめていた大地は、バラバラに四散し、宇宙空間を漂っていた。

……どうして……こんなことに……？

明日も明後日も変わらないと信じていた日常がなんで……？

……X105ストライク！聞こえているか？応答せよ！

通信機の声に焦りが混じっていた。ふいに、

……キラ君！

自分の名を呼ばれ、キラははっと自失からさめた。あの女性仕官マリューさんの声だった。

聞こえていたら……無事なら応答して。キラ君！

「あ……はい、こちら……キラです。」

キラは通信機のスイッチを入れ、答えた。マリユーさんの声に安堵がにじむ。

無事なのね？

「はい、何とか……機体にも問題はなさそうです。」

「こちらの位置はわかる？ 帰投できるかしら」

「はい……」

キラは口元をひきしめ、あらためてレバーを握りなおし、アーケインジェルへと向かう。

そのとき、電子音がコックピットに響き、モニターになにかが表示された。

「救難信号……?」

side リオン

「ようやく、キラが見つかったのか、兄さん？」

キラが発見されたとの連絡が送られ、俺は兄さんに確認を取った。

「ああ、間違いない。……まさかお前まで戦争に巻き込まれてしまつとはな……」

「気にしないでくれ兄さん。もう過ぎたことだから……」

俺達は、戦争にもう介入しているんだ……今更中立とか言っても意味がない……

「リオン！！ そっちは無事なの？」

モニターからストライクが近づいてくるのが見えた。……ん？

あれ？ 何を持っているんだ？

円筒形の細長い……棒？

「推進部が壊れて漂流していたんだ」

ストライクは、その両手に一隻の救難ボートを抱えていた。

「そうか……それで見過ごせなかったんだな？ で、どうするんだ？」

「なら、君は見捨てるのか？」「誰が見捨てるなんて言ったよ。……え？」

「まったく、俺が見捨てるか思っているのか？ 俺がお前の立場でも助けたよ」

心外だな、まったく……

リオンは苦笑しながらキラに言う。

「ごめん、少し気が動転してた。でも、あの人たちが受け入れてくれるかどうか・・・」

「・・・俺も協力する。見捨てることなんてできない。」

そして、現在

「このまま放り出せとでも言うんですか？避難したヘリオポリスの市民が乗ってるんですよ！」

キラが喧嘩腰に言うと、モニターの中でマリユーがため息をついた。

・・・いいわ、許可します

すると、ナタルが反論した。

本艦はまだ戦闘中です！避難民の受け入れなど・・・

壊れていてはしかたないでしょう。今はそんなことで揉めて時間を取りたくないの

艦長に良心があつてよかつたよ・・・

side out

ストライクとファントムの着艦を聞いて駆けつけた友人達が、コックピットから降り立ったキラに飛びついた。

「よかったなあ、キラ！」

「無事だったんだな！」

ツールに抱きつかれ、サイに頭をぐしゃぐしゃにかき回され、キラは目を白黒させつつも、ほっとした様子で笑った。リオンもキラに続いて微笑んだ。すると格納庫の別の方から、声が上がった。

「サイ！」

赤い髪がたなびいた。救難ポートから出てきた避難民の中から、一人飛び出した少女はフレイ・アルスターだった。彼女はまっしぐらにサイの胸に飛び込む。

「ねえっ、いったい何があったの？ヘリオポリスは？あの混乱で、私みんなとはぐれちゃって・・・とっても心細かったのよ！」

抱きつかれたサイは驚き、しかしすぐ嬉しそうにフレイの肩に腕を回した。

「で、ここどこなの？」

フレイはサイから離れて、あたりを見渡しながら言った。

「ああ、ここは」

side out

「ザフト艦の動き、つかめる？」

マリユールの問いかけに、レーダーパネルを見るパル伍長の答えは冴えなかった。

「無理です。ヘリオポリスの残骸の中には、いまだ熱をもつ物も多くこれではレーダーも熱探知も役に立ちません……」

「むこうも同じだと思いがね」

ムウが、少し気休めになることを言った。マリユールは考え込む。

「……いま攻撃をうけたら、こちらに勝ち目はありません」

「だな。こつちには虎の子のストライクとファントムと俺のポロポロのゼロのみだからな。戦闘はな……。じゃ、最大戦速で振り切るかい？かなりの高速艦なんだろ、こいつは？」

「むこうにも高速艦のナスカ級がいます。振り切れるかどうか……」

「なら、素直に投降するか？」

その言葉に、マリユールはぎょっと目が見開く。だがムウは飄々と肩をすくめてみせた。

「それもひとつの手ではあるぜ」

突然『艦長』と呼ばれ、この席につかされることになって、実戦経験のほとんどない彼女はまだ困惑していた。もっともクルーのほとんども彼女と同様だ。しかし……

「投降するつもりはありません」

彼女はしいて、きっぱりと言った。

「この艦とストライクとファントムは、絶対にザフトには渡しません。我々はなんとしても、これを無事に太平洋連邦司令部へ持ち帰らねばならないんです」

「だが月本部とすら連絡の取れないこの状況でどうする？意気込みは買うが、それだけじゃな……」

今度は揶揄するでけでなく、ムウも難しい顔で考え込んだ。そこへ、ナタルが口を挟んだ。

「艦長、私はアルテミスへの寄港を具申しいたします。」

その提案に、二人の大尉が、はつと顔を上げた。

「あそこは現在の本艦の位置から、もつとも取りやすいコース上にある友軍です」

「傘のアルテミスか……」

ムウがつぶやいた。

アルテミスとは、現在からほど近い宙域にあるユーラシアの軍事衛星だ。

「でも、G計画の二機もこの艦も、公式発表どころか友軍の認識コードすら持ってない状況よ……」

「ですがこのまま月に針路を取ったとしても、途中戦闘もすんなり

行けるとは、まさか思いではないでしょうか？物資の搬入もままならぬまま発進した我々には、早急に補給も必要です」

ナタルの言うとおりだ。

戦闘がなかったとしても、途中で物資が足りなくなることは目に見えている。

ナタルは言葉をついだ。

「事態はユーラシアにも理解してもらえるものと思います。現状はなるべく戦闘を避け、アルテミスにて補給を受け、そのうえで月本部との連絡をはかるのが、もっとも現実的な策かとおもいますが」

「アルテミスねえ……」

ムウが懐疑的につぶやく。

「そここちらの思惑どうりに行くな……」

「でも……今はたしかに、それしか手はなさそうね」

マリユールがためらいつつも、決断をくだした。

「デコイ用意！発射と同時にアルテミスへの航路修正のため、メインエンジン噴射を行なう。のちに慣性航行に移行。第二戦闘配備！艦の制御は最小時間にとどめよ！」

マリユールが指示を出す。

「アルテミスまでのサイレントランニング……およそ二時間つてどこか」

ムウがつぶやく。クルーたちには緊張した面持ちだ。

「……………あとは運だな」

マリユールが号令した。

「デコイ発射！メインエンジン噴射！艦アルテミスへの針路へ航路修正！」

side out

「このような事態になるうとは……………」

ヴェサリウスの艦橋では、いまだに動揺のさめない様子でヘリオポリスが存在していた宙域を見つめるアデスがいた。

「いかがされます？中立国のコロニーを破壊したとなれば、評議会も……………」

「地球の新型兵器を製造していたコロニーの、どこが中立だ」

ラウの顔には一片の迷いも、後悔も見出せなかった。

「住民のほとんどは脱出している。さして問題はないさ。……………血のバレンタインの惨劇に比べれば」

アデスは言葉をのみ、またスクリーンを見やった。たしかに……………あの惨劇と比べれば……………。

「アデス、敵の新造戦艦の位置、つかめるかな？」

ラウの言葉に、アデスは驚いた。

「まだ追いつもりですか？しかし先の戦闘で、こちらにはすでにMSが」

「あるじゃないか。四機も」

「地球軍から奪ったMSを投入させるんですか？」

「データの吸い出しさえ終われば、かまわんさ。……あの艦はどうあっても逃がすわけにはいかんよ」

ラウは戦略パネルを見つめて言った。

「網を張るかな……」

「網、で、ありますか？」

「ヴェサリウスは先行し、ここで敵艦を待つ。ガモフにはこのコーズを取らせ、索敵を密にしながらついて来させる」

ラウの指が示す所を見て、アデスが眉を寄せた。

「アルテミスへありますか？しかしそのみに絞ったのでは月方面へ離脱された場合……」

彼の反論は、通信兵の声にさえぎられた。

「大型の熱量感知！戦艦のものと思われます！諸元解析予測コース、地球スイングバイにて、月面、地球軍太平洋連邦本部！」

アデスが見ると、ラウは首を振った。

「それは、困だな。今で私はいっそう確信した」

ラウは言い切った。

「やつらはアルテミスへ向かう。ヴェサリウス発進。ガモフを呼び戻せ」

side アークエンジェル

「・・・おいおい、無茶言っなよ！」

ムウが大きく手を振った。彼らはまだ会談中で、苦々しい顔をしている。マリューが言う。

「ですが、せめてストライクかファントムの力は必要になるかもしれません。フラガ大尉に乗っていただければ・・・」

「冗談。あの坊主達を書き換えたっていうOSのデータ、見てないのか？あんなもんが俺に・・・ってか、普通の人間に扱えるかよ！」

マリューは愕然として黙った。彼女自身、キラのOSカスタマイズの過程と操縦技術をその目で見ている。

ナタルがすばやく口を挟んだ。

「なら、もとに戻させて……とにかく民間人の、しかもコーディネーターの子供達に、大事な機体をこれ以上まかせるわけには……！」

その顔に明らかに嫌悪が漂っている。

なんといつても今彼らが戦っている相手がコーディネーターなのだから。

ムウはため息をついた。

「そんで？俺にノロクサ出たっての？……それに、リオンはナチュラルだぞ！」

「それは……しかし、あれほどの操作ができてナチュラルとは言い難いのでは！」

困って顔を見合わせる二人の前に、ムウはやれやれと肩をすくめ、身を乗り出した。

「あのな。もし戦闘になったら、あの坊主とリオンがめいっぱいまで上げた機体の性能そしてそれを使いこなせるパイロットその両方がなきゃ、やつらにはとても対抗できないぜ」

それは必然的に、ひとつの結論を示していた。

side リオン

アークエンジェル内に設けられた居住区の一室で少年たちは不安げに肩を寄せ合っていた。そこに……

「キラ・ヤマト！リオン・R・フラガ！」

戸口にマリユールさんと兄さんの姿があった。マリユールさんが硬い口調で切り出した話を聞かせてもらった。要するにMSに乗って戦闘に出てほしいと……

「お断りします！」

キラは怒りをこめて叫んだ。

「なぜ僕らがまたあれに乗らなきゃいけないんです！あなたが言ったことは正しいかもしれない。でも、ぼくらは戦いが嫌で、中立を選んだんだ！もうぼくらを巻き込まないでください！」

キラならそうするよな、キラは戦争が嫌いだし……友人が敵なのだから仕方がないかもしれない。

それなら、俺だけでも……

マリユールさんは辛そうな顔で黙り込んだ。

「わかりました。俺はMSに乗ります。」

「……!?」「」

みんなが俺を驚いたような目で見てくる。そしてキラは……

「リオンどうして……？なんで……？」

キラ……すまない、だが、誰かがやらなきゃいけないんだ……

「……すまないな、キラ。お前が戦争嫌いで、その理由でヘリオポリスに来たのは知っている。でも、俺たちは軍の機密を知り、戦争に関わり、その機体で戦闘行為をした。……それにザフトがこの船を襲ってきたらみんなを危険にさらすことになる。だから俺一人でも戦う。キラは兄さん用のOSを作ってくれ。それで……」

無理に選択させることなんてないんだ。キラにだってその自由はある。

「そんな！！　　だったら僕も……！！」

「落ち着けよ、そんな風に場に流されるような決意ではなく、お前自身が決めたほうがいいと俺は思う。それを考えてから答えを出すんだ。いやいや戦闘にできればつらい思いをするだけだから……」

その発言に、キラは黙ってしまった。

「リオンの言うとおりだ。坊主もちゃんと決心したほうがいいぜ。坊主が乗らないなら俺用のOS頼むぜ」

兄さんもキラを気遣うように続く。

「……少し時間をください。」

「わかった」

MSの件はいったんここでお開きとなった。

これからのこと（後書き）

トールが準主人公に昇格しますね。

彼にはリオンとキラを支える・・・いずれアスランも参加しますが・

それにムウも準主人公になりますね。
すみませんタイトルも変更します。

細かな設定ミラージュノコロイドについて（前書き）

これからの物語に支障をきたす恐れがあると考え、投稿させていた
だきます。

世界に”二つの粒子”の理論が同時に存在するのは避けたかったの
で・・・

細かな設定ミラージュノコロイドについて

コズミックイラでは、ミラージュノコロイドが使われているのは皆さんはご存じだと思います。ですが本作品ではそこにメスをいれなければならず、事前に報告させていただきます。

確かにミラージュノコロイドと呼ばれる粒子を用いたビームサーベル同士では切り結べません。ですが、ミラージュノコロイドの性質が完全に理解されていない、または未知の部分があり、まだまだ知らない性質を持っているという設定にさせていただきます。

つまり、あれはこの世界では、ミラージュノコロイドと”呼ばれている”物質であることを理解していただきたいのです。つまり、まだまだ使用用途の種類がほかに存在するということです。

何度も言うように、まだビームサーベル同士の切り結びはできません。フリーダムなどのザフトの新型ガンダムは可能、そして主人公の乗る機体もできる設定にします。(たぶん皆さんはお分かりかもしれませんが)

そろそろ投稿するので少々お待ちください。

細かな設定ミラージュノコロイドについて（後書き）

まずい、クロスものになりそうなので、説明追加しておきます。

決意の一撃（前書き）

ムウ&リオンのフラガ兄弟vsザフトの赤服組です。

決意の一撃

「アスラン・ザラです！通告を受け、出頭いたしました！」

隊長室に呼び出され、しゃっちょこばって敬礼するアスランを前にラウはゆったりと指を組み合わせた。

「君と話すのが遅れてしまったな。呼ばれた理由はわかっているだろう？」

「はっ……命令に違反し、勝手なことをして申し訳ありませんでした！」

「懲罰を課すつもりはないが、話は聞いておきたい。あまりに君らしかめ行動だからね」

アスランは顔をこわばらせてうつむいた。ラウは立ち上がり、その肩に軽く手を置く。

「部下からの正確な報告がなければ、どんな将とて策を誤るものなのだよ。アスラン」

「申し訳ありません……。思いがけないことに動揺してしまい……」

アスランは苦しげに言った。

「あの奪取し損ねた最後の2機に……。あれに乗っているのは、キ

ラ・ヤマト、月の幼年学校え私の友人であつた……コーデイナーです。まさかあのような場で再会するとは思わず……どうしてもそれを確かめたくて……」

ラウは黙って聞いていたが、ややあつてため息をついてみせた。

「なるほど……。戦争とは皮肉なものだな……」

彼は机を回り込み、再びシートについた。

「動揺もいたしかたない。仲のよい友人だったのだろうか？」

「はい……」

「わかつた。そういうことなら次の出撃には、君を外そう」

アスランは、はつとして顔を上げた。

「そんな相手に銃は向けられまい。……私も君に、そんなことはさせたくない」

「いえ隊長！それは……」

彼は激しく首を振り、机の上に身を乗り出した。

「キラは……あいつは、ナチュラルにいいように使われてるんです！あいつ……優秀だけど、ぼうつとしてお人好しだから……気づかずに……それにだから、私は……彼らを説得したいんです！彼らだってコーデイナーです！こちらの言うことがわからないはずありません！」

「君の気持ちはわかる。……だが聞き入れないときは？」

アスランは息をのんだ。

「そのときは……」

彼は顔を曇らせて言いよんだ。だが、すぐにラウを見つめ、きっぱりと言った。

「……私が、撃ちます」

side リオン

さてと、どうするかな？

整備士のマードックさんたちと機体のメンテナンスをし終え、俺は艦の中をふらふらしていた。

艦の中は相変わらず人が少ない。

「リオン！！」

トール達が声をかけてきた。

「お前、無事だったんだな。信号が消えたから本当に心配したんだぞ！！」

「悪いな。キラが吸い出されていつてるからな、無我夢中だった・

」

あの時は、内心ひやひやしていた。

「そういえば、キラはどうしたんだよ？　一緒じゃないのか？」

「その件んだけどね・・・」

俺は敵側に友人がいる、という説明を省いてみんなに話した。

「それで・・・でもお前はなんででるんだよ!？」

「じゃあ、誰がこの船を守る？　兄さんだけじゃ守りきれない・・・必然的に俺は戦わなきゃいけない。それに・・・この中には避難民やお前らがいるだろ。・・・やるしかない」

「そうか・・・お前は・・・戦うんだな・・・」

サイが何かこちらを探るような目で見てくる。そして、

「みんな、聞いたとおりだ。俺達も微力だけど何か手伝うよ。」

なんだと・・・？

「お前らばっか戦わせて、守ってもらってばっかじゃな・・・俺達もやるよ」

ミリアリアも言う。

「こつこつ状況なんだもの。私たちだって、できることとして・・・」

「…………お前ら……………」

「キラは…今はあいつが一番苦しいんだ。だからあいつが戦わなくて済むようにしないとな。」

「まったく…頼りにさせてもらっぜ、みんな。」

「わかった。リオンも死ぬなよ?」

「了解。生き残るさ」

ピキーン!!!

またこの感じ…ザフトか!?

「みんな!! 戦闘の手伝いをするなら早く軍服を着るんだ!」

「え、どうかしたのリオン?」

ミリアリアが尋ねてきた。

「ザフトが来る!!! 急いだほうがいい!」

「え、でも、警報は…ってもう!!」

俺は、みんなを残して格納庫へと向かう。

アークエンジェルの艦橋に、警報が鳴り響いた。

「大型の熱量探知! 戦艦のエンジンとされます。距離200! イ

エロー三三一七マーク02チャーリー！進路ゼロシフトゼロ！」

「横か！同方向へ向かっている！？」

気づかれたのか？と、みな一瞬ぞつとする。

「だがそれにしても、だいぶ遠い……」

ナタルがつぶやく。敵艦はアークエンジェルの左舷方向を、並行して航行していた。

「目標はかなりの高速で移動。横軸で本艦を追い抜きます！
艦
特定！ナスカ級です！」

ムウが唸る。

「……読まれてるぞ。先回りしてこちらの頭を抑えるつもりだ
！」

「ローラシア級は！？」

ナタルはあせって尋ねた。パルがあわてて計器を操作し、はっと息をのむ。

「……本艦の後方三三〇〇に進行する熱源……！いつのまに・
」

二艦に挟まれた……。恐怖に満ちた沈黙が、しばしブリッチの空気を支配する。その沈黙を破るようにムウが口をひらいた。

「やられたな。このままではいずれローラシア級に追いつかれて見つかると。だが逃げようとしてエンジンを使えば、あつと結う間にナス力級が転針してくるってわけだ」

マリユーもナタルも、呆然と黙り込むしかなかった。わずかに見えただ希望が、今や完全に打ち砕かれたのだ。

「おい！二艦のデータと宙域図、こっちにだしてくれ」

ムウの声に、二人の女性仕官は我に返る。

「な、なにか策があると？」

マリユーの艦長らしからぬ狼狽に、ムウはため息をついた。

「・・・それをこれから考えるんだよ」

「すみません！！！！」

ブリッジのドアからリオンの学友たちが現れた。

「いったいどうしたんだ！？ 軍服を着ているなんて・・・？ お前らが戦う必要は・・・？」

「リオンが戦うんです！！ 俺達もやれることをやるんです！！」

「ぼくらは艦の仕事、手伝おうかと思ってさ。人手不足でしょ！？ だったら必要でしょう！！ 普通の人よりは機械やコンピューターの扱いには慣れていきます！！」

「しかし、「坊主達、本当にやるんだな？」大尉！？」

「「「「はい！」「」「」

「わかった。頼りにさせてもらっぜ。」

「（やっぱり兄弟なのね）」

ミリアリアは大尉の言葉を聞いてそう感じた。

side リオン

「リオン！？いつからいたんだ！？」

「敵が攻めてくると感じたんです！！だからあらかじめ待機していたんです。」

「そうか、つってもお前のかん・・・昔からよく当たるよな・・・」

そんなやり取りをしつつ、ブリーフィングを終え、リオンはファントムに、ムウはゼロに向かった。

ローラシア級、後方90に接近！

艦長、そろそろタイムアウトだ。出るぞ

はい、お願いします

艦橋のやりとり、ムウとマリューの会話が通信回線から流れてくる。

坊主達にも作戦は説明した

作戦・・・それは、兄さんの発案だった。いずれ追いつかれ、見つかるであろうアークエンジェルに、敵の攻撃が集中している間に、兄さんがゼロで密かに先行し、前方のナスカ級を叩く、というものだ。

この作戦はタイミングが命だからな。あとはよろしく頼む！

わかりました。・・・お氣をつけて

艦橋との通信を終えると、ムウはリオンにも声をかけた。

じゃあな、坊主達。とにかく艦と自分を守ることだけを考える

「は、はい！ 大尉もお氣をつけて！」

「了解した。ご武運を。」

モニターの中で、ムウはにやっと不敵に笑ったあと、通信を切った。

ムウ・ラ・フラガ、出る！・・・戻ってくるまで沈むなよ！

ゼロが、フワ、と落ちるように艦から離れた。

そのとき、通信機から聞き慣れた声が飛び込んできた。

リオン・・・

「ミリアリアか!?!」

インカムをつけたミリアリアが、モニターの中で真面目くさった顔をしていた。

以後、私がモバイルスーツおよびモバイルアーマーの戦闘管制となります。……よろしくね

最後に照れ隠しのように笑いながらウィンクして、後ろからトノムラに「『よろしくお願いします』、だよ!」と、叱り飛ばされている。まったく、本当に参加してるとはな……

装備はエールストライカーを。アークエンジェルが吹かしたら、あっという間に敵が来るぞ、いいな!?

トノムラが念を押す。

「はいっ!」

エンジン始動!同時に主砲発射!目標、前方ナスカ級!

マリユーの声と同時に、エンジンが低い唸りを上げた。両舷から、225センチ二連装高エネルギー収束火線砲ゴットフリートMK71がせり上がる。

主砲、撃て!

砲口から、まゆばい光がほとばしった。まもなく、チャンドラの叫びが通信機から伝わった。

前方ナスカ級よりモバイルスーツ発進を確認! イージスです

！

ミリアリアが、どこか気遣わしげな表情で、インカムに向けて叫んだ。

ガントリークレーンに吊り下げられたユニットが機体背面に装着され始める。

ストライクファントム、接続！ エールストライカー、スタンバイ！ システムオールグリーン！カタパルト進路クリア！発射タイミングをリオン・R・フラガに譲渡します！

「了解」

ハッチがゆっくり開いた。敵はおそらく奪取したMS全てを出してくる。前回の戦闘でもいきなり赤いのがやってきたからな。

「リオン・R・フラガ、ファントム、発進する！！」

カタパルトがファントムを射出する。

「ファイエイズシフト起動……火器管制ロック解除……」

艦橋ではチャンドラが一足早く、敵の機影をとらえていた。

「後方より接近する熱源3！距離67！モビルスーツです！」

来たか、という緊張がクルーのうちを走る。ナタルの声が響く。

「対モビルスーツ戦闘用意！ミサイル発射管、十三番から二十四番
コリントス装填！バリアント両舷起動！目標データ入力急げ！」

正規の兵士たちに混じってトールたちも真剣な表情でコンソールに
向かっている。艦尾で全十二門の大型ミサイル発射口が開き両翼の
外側にある丸いプレートから折りたたまれて収納されていたリニア
カノンバリアントMK8が突き出した。

戦闘準備が整った中、敵機の情報分析をしていたチャンドラが息を
呑んだ。

「機種特定　これは……！XナンバーX102、デュエ
ル！X103、バスター！X303、イージス！X207、ブリ
ッツです！」

「なに……!？」

一瞬凍りついたクルー達の中で、マリユーが絞り出すような声で呟
く。

「……奪ったGをすべて投入してきたというの……!？」

side キラ

僕は、どうしたいんだろう？

警報が鳴り、リオンは戦いに出て行った。

みんなは管制などの手伝いをしている。

みんなは、戦っている。それぞれの理由と信念で・・・そんなことを考えていると僕は格納庫へと足を運んだ。

僕は、戦争は嫌いだ。本当なら戦いたくなかった。でも、

みんながいなくなるのは・・・もつといやだ！！ だから僕は戦う！！ そして絶対に帰ってくる！！
みんなと一緒に生き残るために・・・

「坊主！？ お前さんなんでここにいるんだよ？」

「僕も戦います！ みんなを守るために！！」

「お前さんをそうさせた理由はなんだ？」

「みんなと一緒に生き残る。だから必ず、勝ちに行きます！！」

マードックさんはその言葉を聞いて、

「だ、そうだぜ艦長。ストライクも出しますか？」

side out

「ストライクじゃない！？ あの機体は・・・！！」

あの機体には確かキラではなく、別の人物が乗っていた機体・・・だが、キラの乗った機体は現れない。

確かめる必要がある。

「その機体に乗っているのは、キラなのか？」

目の前からやってくるファントムに通信を送るアスラン。

「なんだと！？ キラを知っているのか！？」

こちらの予想とは違うが、キラの知り合いなのか？

「お前はキラとはどういう関係なんだ？」

「キラと同じ学校に通っていた、ただの友人だ！」

「もらったああー！！」

イザークがファントムの後方からビームライフルを放つ。

「甘い！」

ファントムはビームを最小限の動きで回避し、イザークに接近する。なんて回避の仕方だ・・・ミスをすれば即撃墜だぞ・・・それを・・・

「させるかよ！！・・・つて何！？」

ファントムは伏兵の存在を予期してたかのようにディアッカの砲撃を躲し、小型のビームハンドガンで乱射してくる。

「おいおい、聞いてねえぞ！！ 黒いのパイロットはほんとにナチュラルか！？」

ディアツかは、紙一重で避けながら、驚愕していた。

「後ろがから空きですよ！」

ミラージュノコロイドを発動し、密かに忍び寄るニコル。だが、それすらも

「見えているんだよ！！姿を消したくらいで……！！！」

ニコルのいる区域をハンドガンで牽制射撃をし、簡単にステルスを解除させられるニコル。

「なんで！？ レーダーにも表示されないのに……目視でも見えないはずなのに……」

わずか一機で、三機が翻弄されている？ それに行動を先読みされている感じがする……

あれに乗っているのは、本当にナチュラルか？ いや、人間か！？

side リオン

やはり、複数相手だと簡単にはいかないか……スペックでは勝っているが、最新鋭のMSをこつも当てられたら苦しいな。

ブリッツのステルス機能は厄介だが、何分『見える』からな、どういいう仕組化はわからんが姿を消したところで俺には何の障害にもならない。

今の俺に四機を討つ力はない。なら……

「じんのおおお!!」

デュエルがなおも高速で接近してくる。なんとというかパイロットから怒気のようなものを感じる。・・こんなことは初めてだ・・・

ビームサーベルを抜き、切りかかるデュエル。ビームサーベルでは防げないので、シールドで何とか防ぐ。

時間を稼ぐだけだ!! 攻撃も牽制程度で・・・回避優先だ。

ピキーン!! 二方向からか!!

デュエルが接近して動きを止めている間にか・・・

「あえて言うておく、読んでいると!!」

ブリッツとバスターが構えたのを察知したファントムは、デュエルのビームサーベルをシールドで受け流しながら避け、両機の射程から回避する。

「なんで読まれているんだ!? 普通なら気づかないはずなのに・・

「お前は本当にキラの友人か!? 素人じゃないぞ、この腕は・・

「俺は危険を察知してるだけだ!! それとあいつとはヘリオポリスで知り合って勉強に励んでいたよ!! お前らが来るまではな!

「!

戦闘中に何言ってるんだろっ・・・まったく、やりづらいな・・・
バスターが94ミリ高エネルギー収束火線ライフルと350ミリガンランチャーを連射してくる。それに続き、ブリッツも50ミリ高エネルギービームライフルを連射し、それに続いてくる。

被弾の可能性はないが、それまでパワーが持つか・・・実際問題としてはまだ余裕はあるが、万が一ということもある。長期戦になればこちらが不利だ。

兄さんはまだなのか!?

side out

「ガモフより入電! 『本艦においても、確認される敵戦力はモビルスーツ一機のみ』とのことです!」

先に打った電信に対する僚艦からの返答に、ラウ・ル・クルーゼは考え込んだ。ヴェサリウスからはムウのゼロを認められずガモフにも確認させたのだ。

「あのMAはまだ出られん　　とういことなのかな?」

一人考えつつ、何か引つかかる。・・・だがしかし、乗る機体がなければ、出撃したくてもできない。

「敵戦艦、距離630に接近! まもなく本艦の有効射程圏内にはいます!」

その報告に、ラウは顔を上げた。

「こちらからも攻撃開始だ、アデス」

「MS隊が展開中です。主砲の発射は……」

狼狽するアデスに、ラウはそっけなく冷笑で応じた。

「友軍の艦砲に当たるような間抜けは、わが隊にいないさ。……むこうは撃ってくるぞ」

なおもアデスはなにか言いたそうだったが、命令どおり号令した。

「主砲発射準備！照準、敵戦艦！」

アークエンジェルで、チャンドラが計器をみなおし、叫び声を上げた。

「前方ナスカ級よりレーザー照射！ ロックされます！」

目の前のMSに集中していたマリューたちは、その報告に青ざめた。ナタルがためらいなく指示をだす。

「ローエン格林発射準備！目標、前方のナスカ級！」

艦長席のマリューがあわててCICに振り返り、その指示を制する。

「待って！フラガ大尉のゼロが接近中です！」

「危険です！撃たなければこちらが撃たれる！」

ナタルが叫び返す。だが、マリユールはうなずかなかつた。

「撃てません！艦、回避行動！」

彼女はきっぱりと言った。ここで浮き足立って自ら作戦を崩すような真似をしたら、負ける。

敵は前後に二隻、MSの数でも敵わない。奇襲が成功しなければ、形勢逆転の可能性は万に一つもなくなる。艦長である彼女は、ムウを信じなければならぬのだ。だが、握りしめたその掌は、じつと汗で濡れていた。

・・・もし、ムウが間に合わなかったら・・・

突然ラウは、はっと頭を起こした。ぞわりと肌を伝うような、この感覚　　すっかりなじみとなった、彼の身の内の憎悪と、愉悦にも似た戦慄を呼び覚ますにはいられない、この感覚は・・・

「アデス！機関最大、艦首下げ！ピッチ角60！」

唐突に、彼の口から命令が飛び出した。アデスは虚をつかれ、ただラウの顔を見るばかりだ。無理もない。彼にこの感覚を伝えることなど不可能だ。だがこの瞬間、その反応の鈍さにラウはどうしようもない

苛立ちをおぼえる。そのとき、管制クルーが驚きの声を上げた。

「本艦底部より接近する熱源っ！MAです！」

「うおりゃあああっ！」

ムウが声を上げながら、最大加速でヴェサリウスに迫る。寸前でヴェサリウスのエンジンが轟音を立て、スラスターを噴射したがもう間に合わない。

ゼロは自動防御装置の迎撃をすいすいとかわし、ガンバレルを展開させ、唸りを上げる巨大な機関部を照準を合わせる。ムウはリニアガンを連射し、ありったけの火力をぶち込んだ。すれ違いざま機関部が火が噴くを見て、ムウは「おっしやあ！」とガッツポーズを作った。そして、すばやくその宙域を離脱した。

ヴェサリウスの艦橋は激しく揺れ、警報が鳴り響いた。

「機関損傷大！推力低下！」

「第五ナトリウム壁損傷！火災発生！ダメージコントロール、隔壁閉鎖！」

クルーの悲鳴のような声が、次々と艦の状況を伝える。

「敵MA離脱！」

その機影を一瞬とらえ、いかりまかせてアデスは叫ぶ。

「撃ち落せーっ！」

だが揺れ、激しく傾く艦の状態では、照準を合わせることもままならない。たった一機の旧式MAで本陣を叩くとは。小賢しい真似をする、と、歯ぎしりしながら、アデスはラウに振り返った。そこで一瞬、息をつめる。

「ムウめ……！」

ラウは唸り、砕けるほどの力でアームレストを握り締めていた。仮面からのぞく顔は、悪鬼のごとく憤怒に歪んでいる。アデスはこれまで見たことがなかった。

「フラガ大尉から通信！』作戦成功。これより帰投する』！」

アークエンジェルの艦橋に歓声が上がる。マリユーは掌をほどき、すぐに次の命令をだした。

「この機を逃さず、前方ナスカ級を撃ちます！」

クルーナ間に再び緊張が戻る。

「了解！ローエングリン一番、二番、発射準備！」

「陽電子バンクチェンバー臨界、マズルチヨーク電位安定しました！」

アークエンジェルの両舷艦首にあるローエングリンの発射口が開く。

「てエッー！」

ナタルの号令と同時に、特装砲ローエングリンが火を噴いた。その圧倒的な火力。ヴェサリウスの右舷をかすった。しかしかすっただけで凄まじい衝撃が艦を襲う。ヴェサリウスは完全に戦闘能力を失い、戦線を離脱するしかなかった。

いまだにファントムに足止めを食っているイザークたち、その戦闘に介入することもできず、迷いながら見守っていたアスランに突然通信が届く。

「ヴェサリウスが被弾！？戦闘中域から撤退！？」

信じられないニュースに、しばし呆然としていたアスランだが、アークエンジェルから信号弾が打ち上げられ、我に返る。

帰還信号？・・・させるかよ！

イザークがファントムに打ちかかる。撤退する前に、せめてMSだけでも落しておきたいと考えたのだろう。

「イザーク！撤退命令だぞ！」

うるさい！腰抜けめ！

その刹那、すさまじい威力のビームがイザークにかすった。そしてかすっただけにも拘らず、デュエルの片腕が爆散した。

「なにいいい！！！！？」

「なんだ！？」

突然の攻撃にアスランたちは驚いた。そして、打たれた方角を見る。

そこには長距離仕様の装備であるストライクが存在していた。

「キラ!？」

アスランは、呆然としていた。最初キラが現れないのは気がかりではあったが、まさかこのタイミングで・・・

「各機!! 撤退するぞ!!」

「くそおおお!!」

「してやられたな、あの機体・・・最初から足止めが目的だったか・・・」

「アスランも早く・・・!!」

「わかった・・・」

キラ・・・どうしてお前は地球軍の味方を・・・

アスランは唇を噛んだ。

side アークエンジェル

ザフト軍の追撃をかわし、何とか戦闘宙域から脱出したアークエンジェル。

ムウが格納庫に降り立ったとき、ファントムからはリオンがもう出ているが、ストライクのハッチはまだ閉じたままだった。整備士の

マードックが、中に声をかけている。

「どうした？」

そばに寄っていったずねると、マードックが困惑の表情をムウに向けた。

「いや・・・坊主がなかなか降りてこないねえんで・・・」

「おやおや」

すると、唐突にハッチが開き、キラが降りてきた。

確かにキラにとっては、これがほとんど初陣だ。確かに最後の最後での参戦だが、キラはまだ幼いと言える年齢であるのだ。それに訓練もつけずにいきなり実戦にやってきた素人なのだ。だからそのずばぬけた能力のために、見落としがちだった。

「もう、終わったんだよ、坊主」

「覚悟はしたけど・・・やっぱりまだ震えが止まらないや・・・引き金を引くのって・・・こんなに苦しいんだ・・・」

「そうか・・・だが・・・よくやったな・・・」

キラは目を瞬かせた。ムウは、父親めいた顔で優しく言った。

「俺もお前もリオンも死ななかつた。艦も無事だ。上出来だせ？」

「あ・・・」

彼にやっと笑顔が戻り、緊張がとかれた。

「まさかあのタイミングでやってくるなんてな・・・決心したのか？」

リオンがキラに近づいてきた。

「うん・・・、まだ震えるけど、僕も戦場に出るよ・・・」

「じゃあ・・・改めてよろしくな、キラ！」

「うん!!」

ムウはその様子を見ながら、これから向かう先のことを考える。

次はアルテミスか・・・厄介なことになってほしくないんだけどなあ・・・

決意の一撃（後書き）

キラはキャラ崩壊を意図してやっつけていきます。
トールも本編よりおいしい役になるので・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5597y/>

機動戦士ガンダムSEED 可能性を抱く者

2011年12月15日01時53分発行